

ブラックで重い幻想郷

のびる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主2人はトラックに轢かれ幻想郷へと来てしまった！

オタク2人で幻想郷で生き残れるのか!?

それとも死ぬのか！

基本普通、たまに熱いバトルがある幻想郷ライフ、スタート!!

※タイトルの意味は（愛が）ブラックで重いつて意味です

目次

幻想郷へ行くバカ共	1
バカと少女達の語り	9
能力把握と！白玉楼行き決定!!	15
白玉楼に着いた！	21
妖夢の3秒クッキング○と修行	29
一方その頃、ゆゆ様と凶は	36
妖夢を連れてった時の話	43
白玉楼から帰る	48
狂気化異変①	55
狂気化異変②	62
狂気化異変③	69

狂気化異変④	75
狂気化異変⑤	82
狂気化異変⑥	88
狂気化異変⑦	95
狂気化異変⑧	102
狂気化異変⑨	110
狂気化異変⑩	117
狂気化異変⑪	124
ヒヤッハー！宴会じゃあー!!①	134
ヒヤッハー！宴会じゃあー!!②	140
ヒヤッハー！宴会じゃあー!!③	148
ヒヤッハー！宴会じゃあー!!④	155
ヒヤッハー！宴会じゃあー!!⑤	165

なんで霊夢は落ちたのか	173
なんか霊夢がベタベタしてくるんですけど	179
ど	179
のびる争奪戦！前編！	188
のびる争奪戦！後編！	195
幾つものヤンデレを巡り、その瞳は何を見る	202
崩壊した理想郷①	210
崩壊した理想郷②	218
崩壊した理想郷③	223
崩壊した理想郷④	230
崩壊した理想郷⑤	237
崩壊した理想郷⑥	245

崩壊した理想郷⑦	251
崩壊した理想郷⑧	260
崩壊した理想郷⑨	266
崩壊した理想郷⑩	272
崩壊した理想郷⑪	282
崩壊した理想郷⑫	294
崩壊した理想郷⑬	307
崩壊した理想郷⑭	321

幻想郷へ行くバカ共

凶

「あー、帰ったら俺ん家でデユエマでもするか」
のびる

「暇だしやろつか」

1人の名を禍月まがつき 凶きよう

「そもそも1人は大平おわひらのびるである

この2人は高校生で、オタク仲間の親友であった
だが、この時の2人はまだ知らなかった

凶

「あーそーいやこの前異世界転生物見たんだけどさあ」
のびる

「うん」

パパートツ!!

2人

「え？」

ドオン！

2人にとって嬉しくも重すぎる愛がのしかかる事になるとは・・・

ここは幻想郷

忘れ去られたもの達が集う世界

霊夢

「あー暇ねえ……」

霊夢

「どっかのバカが異変でも起こしてくれないかしらねえ……」

物騒な事を言っているこの紅白の女子は博麗霊夢。この博麗神社の巫女さんで、異変解決もしている自堕落な人である

霊夢

「……ん、なんだかムカつく事を言われた気がしたわ」

魔理沙

「なーに言っただよ霊夢」

霊夢

「うわっ！なによびつくりさせないでよ魔理沙!!」

魔理沙

「ははっ、すまんすまん。あんまりにもだらーっとしてたんで驚かせようと思ってな」
この金髪魔法使いは霧雨魔理沙。パワーばかりを重視しがちな脳筋である。あとついでに泥棒でもある

魔理沙

「むっ……！私は脳筋じゃないし泥棒でもないぜ！」

聞こえていないはずなのが、反応している……？

魔理沙

「魔法使いの勘ってヤツだな。気にするもんじゃないぜ」

霊夢

「さっきつからアンタ誰と話してんのよ」

魔理沙

「ん？ああ、すまんすまん。詫びに私のキノコをやろう」

霊夢

「……はあ、まあありがたくいただくわ」

————あ————!!

どこかから声が聞こえる

霊夢

「……何か声が聞こえるような」

魔理沙

「ああ、確かに何か聞こえるな。まるでどこかから落っこちるみたいな感じの音が……」

2人

「／（＾o＾）／」

ドサッ

2人

「いったあゝ!!」

突如としてこの場所に現れたオタク2人

霊夢

「……落っこちて来たわね」

魔理沙

「良かったな霊夢、暇が潰せるぜ?」

霊夢

「何がよ!面倒事が増えたみたいなものじゃない……!」

はあ……とため息をつく霊夢

霊夢

「……アンタらどっから来たの?」

未だにしりをさすっている2人は前を見る

するとその途端

凶

「わおー!!(ゴロリ風)」

のびる

「ええー……!!?」

ゴロリ風の声を聞きはつとなつたのびるは

目の前の現実を逃避をするかのように

のびる

「ねえwkwkさん！今日は何を作つて遊ぶの!？」

と、ゴロリのように凶に話しかける

凶

「今日はね、コレを使って遊びます！」

凶も凶で、目の前の事が信じられず、現実逃避をし始めたのか、ノつてしまう

2分くらいコントを続けていたが

霊夢

「……アンタら、いい加減にしなないとぶつ飛ばすわよ……?」

と、霊夢のキレ気味の声で

2人

「アッハイ」

と、
静かになるのだった

バカと少女達の語り

霊夢

「……それで？アンタたちはどうやってここに来たの？」

凶

「いやー転生トラックに轢かれたンゴｗｗｗｗ」

ボケて言う凶

名前はカツコイイのに残念な男である

霊夢

「……真面目に答えなさい……？」

凶

「アツハイ」

霊夢をキレさせる天才のようだ

のびる

「でも、本当にそうとしか言えないんですよね。本当にトラックに轢かれたと思ったらここにきてたんですよね……」

ボケる凶の代わりにのびるが丁寧に言う

霊夢

「……ふーん。まあ事情は分かったわ。でも、すぐには帰せないと思うわ」

のびる

「どうしてですか……?」

霊夢

「今、アンタたちが来たせいで結界が結構破れちゃったのよ。それを直すのに大体5ヶ月くらいは掛かるから、その間は帰せないわ」

のびる

「そうですか……まあ仕方ないですね」

少しガクツとなるのびるだったが、内心

のびる

『幻想郷にきたー!!やったー!!そして5ヶ月は帰れないとか!やったぞー!!』

とかなり喜んでいた

魔理沙

「あ、そうだ。お前らの名前を聞いてなかったぜ。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ。」

そしてこっちは博麗霊夢。この神社にいるダメ巫女さ」

霊夢

「……魔理沙？後で覚えてなさい？」

魔理沙

「……はっはっは、冗談だよ冗談！間に受けんなって！」

霊夢

「ふん……どうだか」

疑いの目を魔理沙に向けている霊夢

魔理沙

「……まあとりあえずお前らの名前を聞かせてくれよ！」

この空気を払拭するように元気よく言う魔理沙

凶

「俺は禍月 凶」

のびる

「僕は大平のびる。よろしくお願いします」

魔理沙

「おう、よろしくな！」

そうして彼ら彼女らで話をする

時間はあつという間に過ぎ、夜になった

魔理沙

「興味深い話が沢山聞けたぜ！ありがとな！」

凶

「おう！」

霊夢

「……お互い苦労するのね」

のびる

「……ですね」

と、いつの間にやら2人ずつに別れて話をしていた
魔理沙と凶は元気よく

霊夢とのびるはため息をつきながら話は終わった

霊夢

「さて、夜になったし泊まって行きなさい」
のびる

「え、いいんですか?」

わかっていてそんな事を言うのびる

霊夢

「だってアンタたち住むところないでしょ。大人しく住みなさい」

魔理沙

「あ、じゃあ私凶を連れてくぜ!」

凶

「え?」

魔理沙

「ほら、お前霊夢をキレさせるだろ？ 追い出されたら妖怪に襲われて終わっちまうから、今日は私んここに来い」 ボソツ

凶

「あ、ああ、わかった」

霊夢

「あ、そう。なら任せたわ」

のびる

「じゃあね、凶」

凶

「じゃあ、また明日な、のびるー！」

のびるは博麗神社の中へ

凶は魔理沙の箒に乗り、魔理沙の家へと行った

能力把握と！白玉楼行き決定！！

翌日、魔理沙と凶は博麗神社に来ていた

凶

「おーいー！のびるウー！！能力あるか確認しようぜエー！！」
のびる

「・・・ヤンキーみたいな登場の仕方やめたら？」

凶

「うえーい！」

のびる

「・・・はあ、わかったよ、仕方ないなあ」

ため息をつきながら了承する

霊夢

「はあ・・・魔理沙アンタ止めなさいよ・・・」

魔理沙

「面白いじゃないか。私は見てて飽きなかったから良いんだぜ」

霊夢

「はあ．．．．．」

何を言っても無駄かと霊夢はそれ以上言うのをやめた

凶

「何か能力ないかねえ．．．．．」

ふと凶の頭の中に鎌のイメージが出てきた

凶

「．．．．．ん？重っ!!」

重くて落としてしまった物を見ると、鎌だった

凶

「．．．．．まじかよ」

のびる

「．．．．．実体化した．．．．．？」

凶は触ってみる

凶

「．．．．．は、はは。マジで実体化してやがる」

のびる

「……ちょっと僕にも触らせて」

凶

「いいぜ」

のびるも触ってみる

のびる

「……本当だ、触れる」

と、のびるが驚いていると

魔理沙

「中々凄い能力だな……ならのびる、お前はどうか？」

聞いてくる魔理沙

のびる

「……えー？えーつと……」

のびるも同様に武器をイメージしてみる

イメージしたのはジカンギレードだった

のびる

「……出てきた」

凶

「はあ!?!」

のびるの発言を聞いて凶が驚いた声を出す

まあ自分と同じ能力してたらそれは驚くとは思う

霊夢

「……のびるも同じ能力、か」

のびる

「結構軽いなあ……使いやすそう」

仮面ライダー好きなのびるからすればライダーの武器を使える能力というのはテン

ションを上げるにはちょうど良かった

のびる

「よーし、ちょっとそこから振り回してみようっ!」

凶

「あ、待てよ!俺もやるわ!」

2人でそこらの無人のところで振り回していた

そんな2人の様子を見ていた魔理沙は

魔理沙

「なあ霊夢、もしかしたらアイツら力を手に入れたからって異変が起きたら着いてくるんじゃないかねか……?」

と、霊夢に言う

霊夢

「……来られても邪魔になるだけだから正直要らないのよね……」

魔理沙

「うーん、でもあのはしやぎようだと確実に来ると思うぜ?」

霊夢

「……うーん、どうしましょうかね」

霊夢と魔理沙は悩む

と、ふと魔理沙の頭の中にいい案が浮かぶ

魔理沙

「ああーそうだ!」

霊夢

「いきなり何よ……いい案でも浮かんだの?」

魔理沙

「ああ。妖夢んとくに連れてって修行だとか言つて異変に来させないようにするんだよ」

霊夢

「……それ、いいかもしれないわね」

魔理沙

「だろ?それにアイツらも多少強くなるだろ。もし異変に来られたって多少戦力にもなるだろうから一石二鳥って訳だ」

霊夢

「今日のアンタ、なんか冴えてるわね」

魔理沙

「だろー?ま、今日のは要らなかつたがな」

こうしてのびると凶は白玉楼に連れていかれるのだった

白玉楼に着いた！

と、いうことで魔理沙に連れられ2人は白玉楼へと続く階段に来ていたのびる

「なんかここ、寒いですね」

魔理沙

「そりゃあ冥界だからな、当然だろ」

凶

「こういう時は布団が欲しいな……ま、寒すぎて布団が吹っ飛びそうだけどな！（激寒ギヤグ）」

のびる

「界王様の時に悟空が言ったギヤグかな？」

凶

「そーそーよく分かったな！まー当時はなんであんなんで笑えんだらうって思ったわ！笑」

魔理沙

「ハックション!!寒すぎてくしゃみが出たわ!」

と、こんなやり取りを挟みつつ、白玉楼に着いた

魔理沙

「ここが白玉楼だぜ」

魔理沙が指を指した所を見ると、そこにはThe・和みたいな建物があり、そこに散る桜がベストマッチ! (音 ビルドドライバー) していた

凶

「すげえ……」

のびる

「確かに……画像と本物じゃあ美しさが違うなあ……」

魔理沙

「よっし、じゃあ行こうぜ」

凶

「ああ!」

のびる

「はー！」

妖夢

「……ふむ、それで私に稽古を付けて欲しいと……」

魔理沙

「そうなんだよ。私だと力加減をミスりそうだし霊夢は自堕落だしそもそもあいつは修行しないし……」

妖夢

「……わかりました、引き受けましょう」

魔理沙

「お、そうか！なら任せませ！」

妖夢

「それで、どのくらいの期間居させればいいんですか？」

魔理沙

「んーまあそうだな．．．2ヶ月くらいかな？あ、ついでに送ってきてもらえると助かるんだぜ」

妖夢

「．．．．．迎えくらいは自分でやったらどうですか？」

魔理沙

「私は私のやるべき事があるからな！頼んだぜ！」

言うこと言つてさっさと帰る魔理沙

妖夢

「はあ．．．．．全くあの人は。どうせやることなんて紅魔館から本を盗んだりするくらいしか無いでしょうに」

失礼な！キノコの事も魔法の事も調べるぞ！

妖夢

「．．．．．？どこかから魔理沙の叫び声が聞こえたような．．．．．」

シーン

妖夢

「気の所為ですね。さて、そろそろあの2人に挨拶をして来ないと．．．．．」

ちよ、もう地の文のここに来ないでよ!?
わかったわかった!じゃあなー!
はあ・・・

と、言うことで一方その頃

のびる

「ここが、白玉楼・・・」

凶

「すげえよな!二次創作とかで見てたのと全く同じだぜ!」
のびる

「うん。凄いよね・・・まあでも、凄いのは目の前にいる人なんだけどね?」

凶

「ああ、あの女版カー〇イとか言われてる幽々子様だよな」
のびる

「まあ、これを見ると納得だよ・・・」

メタイ事を言っている2人の前でかなりの人数のご飯を食している幽々子がいた

凶

「見てるこつちも腹が一杯になるぜ……」

のびる

「……そうだね」

そんな事を言っていると、向こうから妖夢が走ってくる

妖夢

「こらー!!幽々子様ー!!」

体がビクツとなる幽々子

妖夢

「お客様の前でここの主である幽々子様にご飯を食べているとはどういう事ですか!」

かなり怒っている妖夢

のびる

「……あの、僕たちが食べてて良いって言ったんですよ」

凶

「そうそう。だから幽々子様を許してあげてくれ」

妖夢

「しかし……」

のびる

「まあまあ、落ち着いてください。お茶でも入れますから」

妖夢

「あつ、はい……」

完全に立場が逆である

そうしてお茶を妖夢の前に出すのびる

のびる

「どうぞで」

妖夢

「あ、頂きます……」

お茶を啜る妖夢

のびる

「どうですか？」

妖夢

「美味しいですよ……って、立場が逆じゃないですかー!!」

のびる

「あ、つい……すみませんでした」

肩を落とす妖夢

妖夢

「あ、いや、謝らなくてもいいです。何気にお茶を渡されるなんていうのを初めてしてもらったので嬉しかったです」

のびる

「それは良かったです」

優しいな笑顔で言うのびる

凶

「・・・あれ、俺要らなくね・・・？」ボソッ

と、1人呟く凶だった

妖夢の3秒クツキング○と修行

結局、食ってる幽々子を放置して、自己紹介へと移る

妖夢

「私は魂魄妖夢と言います。そしてあちらに居るのが白玉楼の主である西行寺幽々子様です」

妖夢は主らしくない幽々子を見てため息をつくのびる

「僕は大平のびると言います。今日から修行、よろしくお願いします」

凶

「俺は禍月 凶。修行よろしくお願いします！」

妖夢

「では早速、实力を見るために私と戦ってみましょうか」

2人

「え？」

と、いうことで妖夢と戦う事になった

まあ案の定3分前からクッキングされてしまった
正確な秒数を言うと、2，3秒で2人纏めて倒された

妖夢

「……うーん、弱すぎですね」
のびる

「……いや、それはそうでしょう……」

凶

「俺たちは今日武器を持ったばかりだから、太刀打ちできるわけが無いんだよなあ……」

妖夢

「ふむ……ならば素振りをして、手に得物を馴染ませるところから始めましょう」

妖夢

「武器とは自分の扱うものであり、自分を守るものでもありません。ですので、手に馴染ませて、武器を自分の相棒として慣れさせる必要があるのです」

2人

「はいー！」

妖夢

「私もしますので、まずは100回素振りをしましょう」

と、いうことで100回終わらせる2人

のびる

「やった事ないからかなり疲れた……」

凶

「それな……腕がもう上がらん……」

ふとチラつと妖夢の方を見ると、息も切らさずに黙々と素振りをしていたのびる

「これが経験の差か……」

凶

「俺たちもできるようになるんかな……?」

妖夢

「ええ、毎日やれば必ずできるようになります。だから毎日欠かさずやりましょうね」

と、聞いていた妖夢が素振りをしながら言うてくるのびる

「……もうちよつと頑張ろうか」

凶

「そうだな！」

2人も素振りを追加でやる

妖夢

「つと……のびるさん、それ取ってもらっていいですか？」
のびる

「あ、はい」

修行を終えた2人は、夕食の買い出しに出かけていた
のびる

「……あ、これもいいな」

妖夢

「あ、それいいかもですね」

ちなみに凶は白玉楼で休んでいる

買い物を終えて帰宅する

妖夢

「すみません、片方持ってもらっちゃって……」

のびる

「……はは、流石に片方持たなきや何の為についてきたのかわかりませんよ」

妖夢

「……それにしても」

のびる

「……? どうしたんですか?」

妖夢

「いえ、2人で買い出しなんてした事ないですから、新鮮だなあつて」

のびる

「……あはは、八百屋の主人にも彼氏でも出来たのか？なんて茶化されましたからね」

妖夢

「か、かかつ彼氏……」

顔を赤くする妖夢

のびる

「まあ、最初に聞いた時はびっくりしましたけど、まあ僕はこんな可愛い彼女なんて出来ないよなあって思ったので次第とどうでもよくなりましたね」

妖夢

「かつ！かかかかつ可愛い……？！」

顔を林檎のようにする妖夢

のびる

「あ、着きましたよ。さて、じゃあ僕は台所に食材置いてきますねー」

妖夢

「可愛い……彼女……」

妖夢はその言葉を小さい声で連呼していた

一方その頃、ゆゆ様と凶は

のびると妖夢が買い物をしている時

白玉楼

凶

『あーのびる行つたから暇だ……幽々子様と話そうと思つても何話せばいいかわから
ねえ……』

幽々子

「今日の晩御飯は何かしら」

凶

「まだ食うんすね……」

幽々子

「勿論よく妖夢の料理は格別なもの」

凶

『とてつもない食欲だ……』

幽々子の胃袋はどうやらブラックホールのようにだ

ブラックホール！ブラックホール！ブラックホール！ブラックホール！レボリューション！！（エボルド
ライバー）

幽々子

「早く帰ってこないかしら〜」

凶

「……男女が2人って事は帰ってくるの遅くなるかもですね」

幽々子

「遂に妖夢にも男が出来ちやうって訳かしら〜」

凶

「んーまあ分からないですけどね」

凶

「まーアイツが思った事を言う性格だからって落ちる女の子はいねえよなあー（フラ
グ）」

フラグ建てた凶

もはや呪いの1種なのかもしれない

幽々子

「それにしても暇ねえ〜」

凶

「そつすねえ〜」

凶

「……今日は星が綺麗だな。星を見ながら団子とお茶を飲むのは最高だろうなあ……」
チラツと空を見ればもう夜だ

結構夜ギリギリに買い物に出かけて行ったので、こうなるのも必然だが

幽々子

「あらくじやあ星を見ながらお団子を食べる〜？」

凶

「え？今から夜飯があるのに……？」

幽々子

「だって暇じゃない〜少しくらい付き合ってよ〜」

凶

「まあ言い出したのは俺だし、少しくらいなら良いつすよ」

幽々子

「本当々？ありがとうね」

と、いうことで星を見ながら団子を食べることになった

凶

「・・・団子美味っ」

幽々子

「でしよう々？妖夢が買ってくるお団子は美味しいのよ」

凶

「凄いつすね」

幽々子

「そうでしよう々？」

ふふんと自慢げに語る幽々子

凶

「まあ凄いの妖夢であつて幽々子様じゃない気がするんですけどね」

幽々子

「あはは」

凶

「笑って誤魔化さないでくださいよー」

そうして2人が帰ってくるまで2人で談笑していた

夕飯

みんな

「いただきますー！」

のびる

「わー美味しそうだー！」

凶

「それなあー！」

妖夢の作ったご飯を物凄い勢いで食っていくバカ2人

妖夢

「……」

のびる

「あれ、どうしたの妖夢さん。顔赤いよ？」

凶

「……ん？」

ふとさっき自分が言っていた事を思い出す

『まーアイツが思った事を言う性格だからって落ちる女の子はいねえよなあー』

凶

「あれこれもしかして……俺フラグ建てた？」

それを理解した凶はニヤリと笑って

凶

「おいのびるー！お前ちよつと妖夢の看病してやったら？」

凶

「風邪引いてるかもしれねえしな！」

それを聞いたのびるは
のびる

「それは大変だ！妖夢さん、布団に行こう？」

凶

「良かったな妖夢！のびるが看病してくれるってよ！」

妖夢

「ひゃっ、ひゃい！」

のびる

「歩けないなら背負って行くよ」

のびるは妖夢を背負って妖夢の部屋まで行った

凶

「（。▽。）フハハハ」

幽々子

「あら〜」ニヤニヤ

後に残った2人はニヤニヤしていた

妖夢を連れてった時の話

凶と幽々子がニヤニヤしていた時、のびるは妖夢を部屋まで送っていった

のびる

「妖夢さん、降ろすよ……?」

妖夢

「は、はいいい……」

未だに顔が赤い妖夢

のびる

「何か飲みたいものとかある?」

妖夢

「い、いえ、特に何もありません……」

妖夢

「……あの、のびるさん」

のびる

「どうしたんですか？」

妖夢

「わ、私の事を妖夢と呼び捨てにして貰っていいですか？」

唐突にそんな事を言う妖夢

のびる

「えっ、ええ……!?」

のびる

「べっ、別にか、構いませんけど……!」

妖夢

「あ、あと敬語も撮ってください……!」

のびる

「えっ、ええ……?」

のびる

「わ、わかり……わ、わかったよ……よ、妖夢……!」

妖夢

「……あ、ありがとう、のびるくん……!」

そのあまりの破壊力に

のびる

「うっ……!!?」

と、ギリギリ保ったが、萌え死にかけてのびる

『ちよ、ちよちよちよ、ちよつと待った……！落ち着け僕。落ち着くんだ。まだまだまだ、焦るにはまだ早いんだ……！そ、そうだ！数を数えれば落ち着くはず！123456789……ダメだ落ち着かない！僕は文系だった……っ!!』

と、頭途中で凄まじい量の1人会話を繰り返しているのびるだったが、妖夢の一言でその会話も一瞬止まった

妖夢

「の、のびるくん……どうしたの……?」

のびる

「あっ……」

のびる

『まだ！まだやられるわけには行かないんだ!!まだ立ち上がれる！だから』

とまた1人会話が始まった

妖夢

「わ、私はもう寝るね……！おやすみなさい！」

言ったことで恥ずかしくなりすぎたのか妖夢は寝た（ドキドキすぎて寝れない）のびる

「お、おやすみ……妖夢……！」

妖夢の部屋から出た瞬間、秒速であの2人がいるとこまで走るのびる

のびる

「ちよ、ちよちよ、どうなってんの!？」

凶

「さあ？俺は知らんなあ？」

ニヤニヤしながら言う凶

幽々子

「私も知らないわ〜」

必死にニヤつくのを抑えている幽々子

のびる

「うっそだあ……何か知ってるよね……？」

凶

「いや、本当に知りませんねえ〜？ねえ〜幽々子様〜？」

幽々子

「ええ〜知らないわ〜？」

うわあ胡散臭いと思いつながら、これ以上追求しても仕方ないと思い、それ以上言うのをやめて宛てがわれた部屋に行く

その後ろ姿をニヤニヤしながら見守る凶と幽々子だった

凶

「まだ気づいてないのか・・・ククッ」

幽々子

「そうねえ〜気づいてないみたいねえ〜フフッ」

白玉楼から帰る

あれからかれこれ2ヶ月経った
キングクリムゾン！

修行が終わり、剣の扱い方なら結構な物になっていた
のびる

「・・・この2ヶ月で少しは強くなってるんじゃないかな・・・」

凶

「まあ2ヶ月前の俺らと比べたら格段に強くなってるだろ」

と、妖夢がこっちに來ていることを確認する2人

凶

「おっと、お前の嫁（仮）がおいでなすったぜ」
のびる

「嫁じゃない！友達だよ！」

凶

「お前それ妖夢の前で言ったら悲しげな顔されんぞ……？」
のびる

「……妖夢は僕の事が好きなの？」（薄々気づいてるけど気づかないフリをしている）

凶

「はぁー……っ……」

クソデカため息をつく凶

凶

「本当は気づいてんだろ？」

のびる

「……さあ、なんの事かな？H A H A H A！」

そんな事を言っていたら妖夢がこちらに来た

妖夢

「なんの話をしてたんですか？」

凶

「ん？いや、今日で白玉楼を去るのかと思ってな……しみじみしていた所さ」

妖夢

「そうですね……」チラチラ

のびる

「……去るのが惜しいなあ」アセダラダラ

チラチラ見ている妖夢の視線に必死になって気付かないふりをしているのびるであつた

凶

「あつ（察し）」

凶

『コイツ絶対殺られるわwww今から楽しみだわwww』

ニヤつきを若干抑えきれていない凶

凶

「あ、幽々子様」ニヤ

足音を立てずにそつと近づくと幽々子に気づき、声を掛ける凶

幽々子

「あらく私はお邪魔だったかしらねえ？」ニヤニヤ

妖夢

「ゆ、幽々子様！そ、そんな事はありませんよ!?」

ニヤつきながら登場した幽々子に焦る妖夢

のびる

「と、とりあえず2ヶ月間お世話になりました。とても楽しかったです!」

凶

「じゃーな、妖夢ー幽々子様ー」

のびる

「凶はまともに挨拶もできないの・・・?」

凶

「うっせー!お前は俺の親か!」

妖夢

「・・・じゃあねー!のびるくん!禍月さーん!」

幽々子

「また遊びに来なさいな」

とまあ友達の家ノリで別れたのだった

途中、空飛べない事を思い出して妖夢に頼んだりしたが無事博麗神社に着いた

のびる

「・・・ああー怖かった」

凶

「まさかお前が途中で気絶するとは思わなかったがな」

のびる

「高所恐怖症だからね、仕方ないと思うよ」

凶

「お陰で妖夢が取り乱して大変だったぜ」

霊夢

「あら、帰ってきたのね」

神社の前で会話していたら霊夢が気付かない訳が無かった
のびる

「……ただいま？」

霊夢

「……なんで疑問形？普通にただいまでいいじゃない」
のびる

「そ、そうですね……」

霊夢

「まあ自分の本来の帰る場所じゃないって思ったらただいまっていうのが違和感あるのはしょうがないけどね」

霊夢

「でも今帰る場所はここだからただいまでいいのよ」
のびる

「ありがとうございます・・・」

凶

『なんか今日も今日とて空気じゃね？』

と、不遇さを嘆く凶だった

狂気化異変①

凶

「……?おい、なんか向こうから煙出てねえか……?」
のびる

「え?……本当だ」

霊夢

「……何かしらの異変と見るべきなのかしらね」
凶

「まあそう見るのが妥当だろうな。普通あそこまで人里が燃えている訳がねえからな」
唐突に凶が真面目になったのを見て、のびるは驚く

凶

「なんだその驚いた顔は」

のびる

「いや、なんか急にまともな事語り出したから驚いて……」

凶

「失礼な！俺だって真面目な時くらいあるわ！」
のびる

「……うーん、まあそうなのかな？」

テキトーに返すのびるだった

霊夢

「とりあえず行きましようか」

凶

「おう！」

人里

ウオーツ!!

ブツコロシテヤルゼ!

オラア!!

ヒヒヒヒヒ

ザマアミロ!

ウエーイ!!

1人なんか変なのが混じっているような気がするが気にしない

霊夢

「何……これ……?」

のびる

「人同士が……」

凶

「殺しあつてやがる……!」

のびる

「と、止めないと!」

のびるが前に出ようとするが

霊夢

「アンタじゃ簡単に殺られるわよ！」

のびる

「そんな事やってみな「あの状態の人間は何をしでかすかわからないからよ!!」……わ
かりました！」

と、叫んでいると、横から狂気化した人間が襲いかかってくる

人里の人

「殺す！」

凶

「……っ！」

凶は即座にスタンガンを生み出し、襲いかかってきた人に当てる

人里の人

「うあああっ!!」

そうして気絶する

凶

「あ、そっか」

スタンガンと倒れた人を交互に見て、何かが浮かんだようだ

凶

「おい、のびる！水持ってこい！」

のびる

「……え？」

凶

「いいから早く！」

のびる

「……ああ！わかった！」

どうやらのびるも気づいたようだ

霊夢

「一体何をすつてのよ……」

霊夢の周りにも人が襲いかかってきているが、霊夢は慣れた手つきで次々に気絶させていく

のびる

「よし、そこらに撒こう」

と、のびるは持ってきた水をそこらに撒く

狂気化した人々はそれがなんの意味を持っているのか分からずに、ただ争いあつてい

た
凶

「つしや、くらいやがれええつ!!」

凶はスイッチを入れたままのスタンガンをその撒いた水のところにぶん投げた

水は電気を通しやすい

水を触媒に通つていった電気は人々の体にたどり着き

人々

「ぎやああああつ!!」

次々に気絶させていった

凶

「よし、大成功!」

霊夢

「・・・なかなかやるじゃない」

凶

「人は焦ると効果的な作戦が思いつかなくなる。だけど俺は案外冷静だな。思いついたわけよ」

のびる

「いつもはバカをやってるのに……」

凶

「ははっ！見直したか？」

のびる

「んー、少しね」

凶

「なんだよそれ……」

霊夢

「そこそこ片付けたんで次んどこに行くわよ」

2人は頷く

狂気化異変②

魔法の森

霊夢

「まずは魔理沙がどうなっているのかを確かめに行くわよ」

と、魔法の森に来た3人

雑魚を蹴散らしつつ、魔理沙の家へと行くが、そこではアリスと魔理沙が戦っていた

霊夢

「私は魔理沙を止めるわ！2人はアリスを止めて！」

2人

「はい！／おう！」

アリスを止めようと2人で抑えるが

のびる

「ちよ、力……強……！」

凶

「女の子が……こんな……怪力で……いいのか!?!」
狂気化しているアリスの力が強く、止められない

強引に弾かれてしまった

のびる

「……くっ、こうなったら!」

ガンガンセイバー!

ジカンギレード!

のびる

「二刀流で突っ込むまで!」

バカが突っ込む

凶

「脳筋ヤメロ」

と、ツッコんだが聞いていなかった

ピコーンとふと頭の中に決着をつける案が思い浮かぶ

凶

「試してみるか………!」

ママさんのティロ・ファイナーレを頭の中に思い浮かべる

凶

「………出た!」

凶

「よし、行くぜえ!」

一方のびるはというと

のびる

「ええい!」

早々にガンガンセイバーをぶん投げ、ジカンギレードで斬りかかろうとしていた

アリス

「………」

アリスはそれをバックステップで避ける

のびるは外したのでデカイ隙を見せることになったが

「よし、行くぜえ！」

凶

「ティロ・ファイナーレ!!」

ドオン!!

凶のティロ・ファイナーレにより、アリスと一緒に吹き飛ばされてしまった

凶

「あっ……やっちゃったZ E ☆」

やっちゃったZ Eじゃないでしょう！

霊夢は魔理沙を秒殺していた

霊夢

「はぁ……いくらなんだって頭のおかしいアンタに負けるわけがないのよね」

狂気化の影響で動きが単調で読みやすくなっていた魔理沙

いつもの魔理沙を知っている霊夢にはただの雑魚と変わらなかった

霊夢

「それにしてもアイツら大丈夫かしらね？」

と、ふと後ろを見ると

霊夢

「……は？」

デカイ大砲を持った凶がアリスとのびるに向かって狙いを定めて撃っているところだった

霊夢

「ちよ、待ちな（ドオン!!）遅かった……！」

霊夢の心労がまた増えたのだった

その頃、飛ばされた2人はというと

のびる

「………」

アリス

「………」

2人揃って倒れていた

のびる

「………いてて……奇跡的に軽傷で済んで良かった………」

のびるが先に起き、ふと隣を見ると

なんだかよく分からないが服がボロボロのアリスが倒れていた
のびる

「うわあああつ!!ヤバイよヤバイよ!早く何とかしなきゃ!」

アリス

「………んう」

最悪なタイミングで起きそうになっているアリスのびる

「はっ！ そうだ、上を着せればいいんだ！」

上を着せようと脱いだ瞬間

アリス

「……何をしようとしているのかしら？」

のびる

「……はっ」

アリスが目覚めてしまった

一体どうなるのやら！

狂気化異変③

アリス

「私に何をするつもりだったのかしら……?」

服がボロボロの状態でのびるに問い詰めるアリスのびる

「イエナニモシヨウトハシテマセンヨ」

何故か片言で言ってしまう

アリス

「……凄く怪しいんだけど?」

のびる

「……と、とりあえず僕は何もしようとはしてませんから」

一方その頃

霊夢

「あんなデカい大砲撃つんじゃないわよ!!」

凶

「しょうがないじゃないか。ああしなきゃ止められなかったんだから」

魔理沙

「……何があつたんだ？」

正気に戻った魔理沙と霊夢と凶がのびるとアリスを探しているところであつた

霊夢

「……実は」

霊夢説明中

霊夢

「……って訳。全くコイツは力の加減ってものを知らないのかしら」

魔理沙

「はははっ！ やっぱ面白い奴だな！」

凶

「凄いでしょ!? 最っ高でしょ!? 天っ才でしょ!？」

霊夢

「いえ、アンタはバカね」

凶

「わーお……ド直球う……」

魔理沙

「まあ天才では無いけど最高ではあるな（笑）」

霊夢

のびる

「つていうかこれ着てください！目のやり場に困りますから！」

アリス

「……あつ……」

自分の状態を確認したにも関わらず、追求するので頭がいつぱいになっていたアリスは自分が今どういう格好なのかを忘れていた

そして、アリスはのびるの上着をひったくって着た

のびる

「まさか今までわs「それ以上言ったらコロス」……アツハイ」

霊夢

「……リスー!!」

アリス

「……霊夢？」

と、気まずい雰囲気の中、打開してくれそうな人達が来た

霊夢

「無事だったのね」

アリス

「ええまあ。でもその変なのがいなければ心もそこそこ元気だったでしょうね」

霊夢

「変なの……？ああ、のびるか……」

のびる

「霊夢さーん!! 助けて下さいよおー!!」

霊夢がチラツとのびるの方を見ると、涙目になって助けを求めている

霊夢

『……もしかしてコイツ、襲おうとしたとか思われたんじゃ?』

と、アリスの状態とのびるの状態から察した霊夢だった

狂気化異変④

これまでの経緯を霊夢がアリスに説明していた

霊夢説明中

アリス

「へえ……そんな事になってたのね」

霊夢

「ええ。だからアイツを責めないで頂戴。多分普通に上着を着せてやろうとしただけでしょうから」

アリス

「……わかったわ。許してあげる」

のびる

「……ホッ」

霊夢

「許してもらえて良かったわね」

のびる

「霊夢さんのお陰ですよ。ありがとうございます！」

霊夢

「そうやってかしくまってお礼言われるとちよつと恥ずかしくなるわね……
顔をすこし赤くする霊夢

魔理沙

「そういえば霊夢、次はどこへ行くんだ？」

霊夢

「……紅魔館でいいんじゃないかしら。悪の根城っぽい雰囲気だし」

凶

『そんなテキトーな決め方でいいのか……』

と、言うことでレイマリアリとのび凶の5人は紅魔館に行くことになった

霧の湖

妖精たちが争っていた

ワーワー

シネエ!

アタイハサイキョー!

魔理沙

「妖精が戦ってんなあ・・・」

のびる

「なんだかあんまり迫力ないですね」

アリス

「まあ妖精だし当たり前よ」

霊夢

「あーコイツら相手すんの面倒ねー」

凶

「じゃー俺やろうか」

霊夢

「アンタまた変なの出すんじゃないでしょうね？」

凶

「いや、流石にあれはもう出さねえよ」

魔理沙

「えー？ 私は見たいから出してくれ！」

霊夢

「面倒な事になるから絶対出さないで頂戴」

凶

「わかってるって！」

と、1人突っ込むバカ

オリヤー！！

ドコニイコウトイウノカネ？

ウワコノカズハヤバイ

ギエエー！

大量の妖精から狙われヤバい事になっている凶

アリス

「あの子はバカなのかしら？」

のびる

「バカだね」

魔理沙

「バカだぜ」

霊夢

「バカね」

タースケテー!!

霊夢

「ほら、魔理沙。助けてーだって。助けに行つてやりなさい」

魔理沙

「え？うーん、まあ仕方ないか・・・」

と、箒に乗った魔理沙が凶を助けに行く

ホラ、ツカマレ!

マリサアア!

ヨッ! ホッ!

マジックミサイル!

キヤー!

ワー!

ヤラレター!

ナンデアタイモア!?

チルノチャーン!

魔理沙

「ぎゅっ! と、こんなもんだぜ!」

凶

「……死ぬかと思った……魔理沙サンキュー！」

魔理沙

「……あ、ああ！この魔理沙様に任せとけてんだ！」

一連の流れを見た残りの人たちはというと

アリス

「ねえ、あの2人付き合ってるのかしら」

霊夢

「……かもしれない雰囲気出してたわね」

のびる

「ついに凶に彼女が出来るのか……！」シミジミ

と、2人付き合ってるのかということ話を話していた

まあこんななんやかんやがありながら、無事(?)に紅魔館に着いた

狂気化異変⑤

紅魔館

霊夢

「やっぱり門番いるわねえ……」

凶

「逆にいない方がおかしいだろ……」

魔理沙

「いや、あいつ結構小さい子に人気だからたまーに居なくなったりするんだよなあ」

アリス

「つていうか普通の子供はここに来ないでしょ」

のびる

「ここら辺危険すぎますもんね」

魔理沙

「あ、でもあいつ寝てねえかな？」

チラツと門番の顔を見るとバリバリ起きていた。しかも睨みながら

魔理沙

「おーおつかねえおつかねえ。つーかあいつがまともに門番してるとこ初めて見たかもしれん」

アリス

「大体寝てるものね……」

のびる

「あ、そういえばどうするんですか？ 門番相手にしてたら面倒ですよ？」

まともな話をするのびる

霊夢

「んー、2手に別れましょうか」

魔理沙

「おいおい、いつもは秒殺して行くのにどうして今回はそんな事言うんだ？」

霊夢

「……今のアイツの殺気がいつも以上に凄まじいのよ。戦ったら消耗は避けられない。だから2手に別れて入るのよ」

凶

「おー、意外と頭回ってんのな」

霊夢

「……ぶっ飛ばすわよ？」

凶

「サーセン」

相変わらず余計な事を言う凶だった

と、いうことでチームが決まった

美鈴と戦うチーム

アリス&のびる

紅魔館に突入するチーム

残りの3人

アリマリ凶

「なんか紹介雑じゃね？（じゃない？）」

美鈴と戦うことになったのびる！
果たして生き残れるのか!?

のびるとアリスがまず美鈴の前に出て気を逸らす
その隙に突入チームが突っ切っていった

美鈴がのびるに対して凄まじい連撃を食らわせる
瞬時にメロンディフェンダーを呼び出し、ガードするが
のびる

「腕が……っ！痺れ……っ！」

たかだか2ヶ月くらい修行した程度では美鈴の攻撃を完全に受け切るのは無理が
あった

と、いかもうやられそうである

アリス

「操符 乙女文楽！」

のびる

「……うわあっ!!」

のびるが弾き飛ばされた丁度のタイミングでスペカを発動させるアリスのびるが居た場所に大玉を配置し、そこから人形を出す
そしてレーザーや弾幕を出し、美鈴にダメージを与える

美鈴

「……くっ」

一旦引く美鈴

のびる

「……いっつっ!……今だっ」

フレイムセイバーを生み出し、それを蹴る

丁度人形をすり抜け、美鈴に当たる所まで近づいた

美鈴

「……しっ!」

来たフレームセイバーを円の動きで流す
のびる

「……やっぱりダメか」

アリス

「当たり前よ！正面からなんて弾いてくださいって言ってるようなものよ！」
のびる

「……普通に攻撃じゃなくて防御に徹してアリスさんが攻撃するほうが確かか」
アリス

「なんで私の名前を知ってるのか気になるけど、今はそれどころじゃないから後で聞かせなさいよ……！」

のびる

「わかりました！」

メロンデیفエンダー！

無双セイバー！

のびる

「よし、行くぞ！」

狂気化異変⑥

一方その頃突入チームは

凶

「霊夢よ、私についてこられるかな？」

魔理沙の箒の後ろに乗りながらバカを言う凶

霊夢

「アンタただ箒に乗ってるだけじゃない……」

呆れる霊夢

霊夢

「向こうに行けば良かったかしら……」

凶

「おやおやあゝ？ 霊夢はのびるの事が好きなんですなあゝ？」

茶化す凶

霊夢

「そ、そんな訳ないわよ！」

凶

「こりやー俺らんとこにアリス連れてくれば良かったなあ？」

霊夢

「だから違うつつつてんでしょ!？」

魔理沙

「そしたらあれだな、美鈴秒殺してのびると2人つきりになれたなく」

霊夢

「……………」

凶

「いやあく選択ミスったなあ!なあ魔理沙!？」

魔理沙

「そうだなあくしかしあの霊夢に好きな人ができるなんてなあく」

霊夢

「……………夢符 封魔陣!」

針が魔理沙の顔を掠めるように出てきた

霊夢

「……………次言ったら当てる」

魔理凶

「ハイ、スイマセンデシタ」

と、ネタ会話みたいな事をしていたらいつの間にか玉座みたいなどに着いていた

凶

「……すげえ、玉座か……?」

「あら……意外と早かったのね」

凶

「……ハアン? (マイクラの村人風)」

魔理沙

「……はあ?」

霊夢

「……はああっ!?!」

「何をそんなに驚いてるのかしら．．．あ、そっか、私が2人いるなんて事になったらそりゃあ驚くわねえ．．．？」

魔理凶

「．．．．．霊夢が」

霊夢

「私が．．．．．」

3人

「もう1人!？」

紅魔館 門

のびるが美鈴の攻撃を受け、アリスが攻撃するといった理想的な陣形なのだが、美鈴が強すぎて全くダメージを与えられていないのが現状だったのびる

「……くそっ!!」

しかもこのびるが攻撃の受けすぎで半ば戦闘不能状態になっていた

アリス

「……まで強いなんて……!」

のびる

「……くっこそ、まだ、やれる!」

口の中に溜まった血を吐き出しながら言うのびる

アリス

「……無茶よ!そんな体で前に出てても死ぬだけよ!」

のびる

「だったらどうしろって言うんですか!」

アリス

「……撤退するしか無いわ」

のびる

「……そんな！」

アリス

「2人でやって勝てないならそうするしか無いわよ……！」

と、そんな事を言っていたら美鈴が殺す気でアリスに突撃してくる

アリス

「……っ!!」

のびる

「危ない!!」

メロンデیفエンダー!

庇うのびる

アリスの目の前で鮮血が散る

アリス

「……………えっ?」

砕けたデイフェンダーと共に、吹っ飛ぶ

ゴシヤリと、気味の悪い音がアリスの耳に届く

ベチャリと落ちる音はその場に響いた

狂気化異変⑦

アリス

「……嘘」

目の前で人が血を流しながら吹っ飛ぶのを見たアリスは、未だに現実を受け入れられずに居た

そして、こちらに視線を向ける美鈴に対して恐怖を抱いていた
アリス

「……こないで……っ!!」

徐々に後ずさるアリス

美鈴はゆっくりとアリスを追い詰めていく

そして、美鈴はアリスを潰すために拳を振り上げる

恐怖で目を瞑るアリス

振り上げた拳が迫る

紅魔館

紫霊夢

「さて、と、私の手駒たち、行きなさい？」

パチンと指を鳴らすと、レミリアとフラン、そして咲夜が襲いかかってくる
霊夢

「アンタらはそいつらの足止めしといて！コイツは私が仕留めるわ！」

2人

「OK!!」

魔理凶VSレミフラ咲夜

凶

「幼女に手を出す趣味は無いんだけどなあ……！」

ごく普通の剣を出す凶

凶

「物は試しだ、どれくらい効くか試してみるかあ！」

ドオン!!

凶が危険を察知し、少し体をずらすと、その場所で爆発が起きる

凶

「あつぶな!!そうか、フランの能力は破壊する能力!……避けて良かった……」

!」

ホツとしている凶の背後からレミリアが襲いかかる

凶

「うわっ!!危ねえなオイ!」

凶

「2対1はきちいか?」

凶

「まあ頭おかしくなつてつから避けんのは簡単だけどな……!流石にそろそろキツくなつてきたなあ……っ!」

的確に攻撃を捌いていく凶

この短時間で攻撃を見切ったらしい

魔理沙

「おいおい、凶のやつもうあいつらの攻撃見切れてんのか……?バケモンかあいつは……っ!」

魔理沙は咲夜の相手をしていた

魔理沙

「つつても、あいつらもこいつも動きが単調だからな!見切るのにそんなに時間はかか

んねえよな！」

魔理沙

「マジックミサイルっ!!」

咲夜

「……!!」

マジックミサイルを咲夜の目の前で爆発させ、目くらましした瞬間

魔理沙

「マスタアアア!!スパアアアックっ!!」

間髪入れず、マスパを至近距離で直撃させる

魔理沙

「つと、終わりい!!さて、あいつの助けにでも行くかあ……」

と、凶の方を見ると

凶

「……はあ、ギリギリ勝ったあゝ！」

勝っていた

魔理沙

「おい！ウツソだろお前!?!どーやってあいつら倒したんだよ!!」

凶

「いや、のびるみたいに二刀流で、追加で雨の炎を流してみたら勝った」

魔理沙

「二刀流はまだ分かるが、雨の・・・炎? ってのはなんなんだ?」

凶

「んー、とある家庭教師でヒットマンなアニメに出てくる特殊な炎さ。それには沈静の効果があつて、それをあいつらにぶっつけただけだよ」

魔理沙

「ほう・・・中々興味深いじゃないか・・・!」

魔理沙の好奇心をくすぐる内容な為か食いつく

凶

「そんな事より霊夢を助けに行かねえと!」

魔理沙

「あいつなら大丈夫だろ?」

と、ふと霊夢の方に目を向けると

紫霊夢

霊夢

「そんなものなの？ガツカリねえ．．．同じ自分だからと期待したのに．．．」

「．．．くっ．．．中々やるわね．．．！」

押されていた

狂気化異変⑧

紅魔館 門

グイツ

アリス

「……あつ！」

何かにアリスが引つ張られる

アリス

「一体……何が……？」

後ろを向く

のびる

「……はあ」

そこには泥に塗れたのびるが居た

アリス

「え．．．．．？え．．．．．？」

アリスが信じられないものを見るような目でのびるを見る
のびる

「ははっ、どうしたんですか？僕はまだ生きてますよ！」

まあ手がまだ痛むんですけどねと言いながら、笑顔でそこに居た

アリス

「な、なんで．．．．．？」

のびる

「それは後で言います」

のびるはまた武器を生み出し、美鈴に突っ込む

アリス

「．．．．．死ぬわよ!!？」

のびる

「大丈夫です！」

のびるの手元にはジオウライドウオッチがあつた

それを生み出したジカンギレードに装填する

ジカンギレード

「フィニッシュタイム!!」

そしてトリガーを押す

ジカンギレード

「ジオウ!ギリギリスラッシュ!!」

のびる

「はああああっ!!」

そして、美鈴の拳とぶつかり合い—————

ドサツ

のびる

「はあ……はあ……」

————勝った

紅魔館

凶 凶 「・・・このまま戦ったら気絶してる人たちに当たるな・・・」

「魔理沙は霊夢の援護に向かってくれ！」

魔理沙

「ええ!?!お前はどうぞすんだよ！」

凶

「俺は気絶してる奴らを脇に寄せとく！終わったらすぐに行くから先に行つといてくれ

！」

魔理沙

「……わかった！」

紫霊夢

「……弱すぎるわ」

霊夢

「……っ!!」

魔理沙

「霊夢!! くっそ!」

魔理沙はマジックミサイルを発射するが

紫霊夢

「遅すぎて避けるのが簡単ね」

全てゆっくりとした動きで回避される

魔理沙

「……ちっ! やはり色が変わっても霊夢は霊夢か!」

紫霊夢

「今度はこつちから行くわよ?」

紫霊夢

「夢符 封魔陣」

針が飛んでくるが、霊夢以上の速さであった

魔理沙

「……速」

トトトトツ

魔理沙は避けられずに全弾当たってしまう

紫霊夢

「安心しなさい？ 急所は外しておいたから……ね？」

魔理沙

「……ぐあああつ!!」

魔理沙が来て即やられてしまった

霊夢

「魔理沙っ!!」

凶

「……どうなってんだ!? なんで魔理沙がやられてんだよ!」

魔理沙

「き、気をつけろ……! あいつの攻撃……速い……っ!」

凶

「つーか魔理沙が避けれねえものを俺が避けれるかってんだ!」

霊夢

「凶……コイツはヤバいくらい強いわ……魔理沙を連れて逃げなさい!」

凶

「ハアン? 魔理沙を連れてくのはいいが、霊夢を見捨てるわけねえだろ!!」

凶

「それにのびるだァって同じ事言うだろうしな!!」

紫霊夢

「美しい友情ってやつかしらね？」

紫霊夢

「まあ、すぐに壊してあげるけど・・・ね？」

狂気化異変⑨

紅魔館 廊下

アリス

「それで、どうやって生きてたの!？」

のびる

「ああ……それですか? えーと、鎧武のメロンの人の盾と、リンゴの人の盾を2重で使ったんですよ」

アリス

「……??」

のびる

「まあ、それは置いといて、そうやって助かったんですよ。……盾が2枚とも破られるとか思ってたんですけどね……」

美鈴

「あはは……すみませんでした……」

のびる

「別に怒ってないですよ？ただ頭がおかしくなっただけですから……」
アリス

「それにしても美鈴がすぐ起きてくれて助かったわね……」
のびる

「ええ……でも驚異的な生命力ですね……」

美鈴

「アリスさんの回復魔法もありましたから、結構すぐ復帰出来ましたよ！ありがとうございます」
「ざいますー！」

アリス

「……そんなにストレートに感謝を言われるのは慣れてないわね……」
少し照れながら言うアリス

のびる

「あそこが凶たちがいる所か！」

Bannon!

のびるたちが扉を開けると、そこに広がっていたのは……！

凶

「くっ……」

霊夢

「……っ」

紫霊夢

「……あら、遅かったのね……？もう倒してしまっただわよ？」

霊夢と凶が倒れている光景だった

そして霊夢がもう一人いる光景だった

のびる

「……は？」

アリス

「え？」

美鈴

「……貴様っ!!」

真っ先に突っ込もうとする美鈴
のびる

「ダメだ!」

美鈴

「どうして止めるんですか!？」

のびる

「相手は霊夢と凶を倒すほどの実力を持っている……!あなた一人じゃ倒せませんよ……!」

美鈴

「だからって指を啜えて見てろって言うんですか!？」

のびる

「誰もそんな事言っていないですよ……!僕はちゃんと言いましたよね?一人じゃ無理だって……!」

のびる

「一人じゃ無理でもみんなで戦えば勝機はあります……!」

美鈴

「……わかりました。少し頭に血が昇ってしまつて冷静な判断が出来てませんでした。

ありがとうございます……!」

アリス

「じゃあ、行きましようか。霊夢を倒しに……!」

紫霊夢に先に攻撃を仕掛けたのはのびるだった
のびる

「大橙丸! フレイムセイバー!」

次々に武器を生み出しては投げまくっていた

紫霊夢

「はあ……そんな攻撃当たらないわよ……?」
のびる

「果たしてそれはどうかな……?」

ジカングレード!!

ジュウ!

放った武器に対して銃撃をするのびる

紫霊夢

「どこを狙ってるの……っ!」

バァン!

ドォン!!

ドカァン!!!

のびる

「例え当たらなくたって爆発させれば多少なりともダメージは与えられるでしょ?」

爆発させた物から煙が出る

紫霊夢

「……なるほど、ちよつとは頭を使えるようねえ?」

煙が晴れたが、無傷のようだった

紫霊夢

「まあ、その程度の知恵では私を倒すことは出来ないでしょうけど!!」

高速でのびるに迫る紫霊夢

美鈴

「おっと、私たちを」

アリス

「忘れていたようね？」

美鈴の蹴りとアリスの弾幕が紫霊夢を襲う

紫霊夢

「なるほど？そいつは私の目を引きつけるための囮って訳ね？」

紫霊夢

「……夢想封印！」

弾幕を弾幕で相殺するという荒業をやったのける紫霊夢

そして美鈴は紫霊夢に蹴り飛ばされた

のびる

「……ははっ、ごり押しすぎるでしょ……」

変な汗がのびるの頬を伝う

果たして勝てるのか……？

狂気化異変⑩

凶

「……づつ！……おい……霊夢……生きてるか……？」

霊夢

「……もち、ろん……生きて、る……！」

凶

「なら……行か、ねえと……あいつら、が……！」

霊夢

「わかつ……てる！……でもっ……！」

霊夢

『体が動かないのよ……っ!!』

のびる

「うわあああつ!!」

ドオオオン!!

アリス

「上海!蓬萊!」

上海

「シャンハイ」

蓬萊

「ホラーイ」

美鈴

「はああつ!!」

のびる

「……くっそー！」

キュイーン

ファイズエツジを生成し、斬り掛かるのびるだが

紫霊夢

「そんな単調な攻撃が通じるわけないでしょ？」

蹴り飛ばされるのびる

だが、ただでやられているわけではなかった

ペガサスボウガンを生成し、撃ち抜く

紫霊夢

「……！二重結界！」

結界を2重で張るが、ひとつの結界を破壊した

紫霊夢

「……チッ！」

のびる

「……攻撃が、通った……っ？」

紫霊夢

「夢想封印！」

のびる

「……メロンディフェンダー!!」

ドオオン!!

のびる

「ぐはあっ!!」

簡単に破壊されるメロン兄貴の盾

のびる

「……はあ……はあ……」

紫霊夢

「チツ……仕留め損なった……!」

美鈴

「大丈夫ですか!？」

床に叩き落とされたのびるに手を差し伸べる美鈴

のびる

「あ、ありがとう……!」

フラフラになりながらも立ち上がるのびる

美鈴

「いえ、お礼はいいです！ですが、私たちではもう決定打になりそうなものがないですよ！」

のびる

「……1つだけあります」

美鈴

「……それはなんですか？」

のびる

「美鈴さんを倒した時にした技なら、多分行けると思う……!!」

美鈴

「……わかりました、それに賭けましょう」

のびる

「……ありがとうございます」

ジカンギレード

「フィニッシュタイム！」

のびるはギレードにジオウライドウオッチを装填する

今度はジウモードでやるようだ

紫霊夢

「ああっ!!鬱陶しいわね!!」

紫霊夢

「封魔陣!!」

針でアリスの弾幕が消滅した

のびる

「今だっ!!」

ジカンギレード

「ジオウ!スレスレシューティング!!」

超火力の光弾が紫霊夢を襲う

紫霊夢

「……っ!?!なるほど……これを狙っていた、と……」

紫霊夢

「……でも甘いわね！」

紫霊夢

「二重結界！そして、夢想封印!!」

自分の護りを厚くし、シューティングを相殺しきれなくても結界で護れるようにした
だが、光弾は夢想封印の威力では相殺しきれず、結界まで到達しようとしていた

紫霊夢

「……でも、結界は破れないわ!!」

そう言う紫霊夢だが、結界にヒビが入っている

紫霊夢

「……なっ!？」

のびる

「行けえええっ!!!」

ドオオオン!!

爆発が、起きた

狂気化異変①

凶

「．．．．お、おい．．．霊夢．．．お前、動け、るか？」

霊夢

「．．．．ええ、少しは動けるようになったわ．．．！」

凶

「なら、御札を、くれ．．．！」

霊夢

「い、いいけど、何に使うのよ．．．！」

凶

「いい、から．．．早く．．．っ！」

霊夢

「え、ええ．．．」

御札を受け取る

凶

「．．．上手く、行って．．．くれよ．．．っ！」

2分後

凶

「．．．これ、が．．．俺の、今の、全能力だ．．．！」ガクツ
霊夢

「．．．これを渡せ、って事ね．．．！」

爆煙が晴れる

紫霊夢

「……………今のは、かなり効いたわよ……………っ！」
のびる

「……………っく！」

首を締められるのびる

紫霊夢

「あはっ……………こうしたら逃げられないでしょう？」
のびる

「……………がっ……………はっ……………!!」

紫霊夢

「……………死になさい」

至近距離で紫霊夢の夢想封印を喰らいそうになる

霊夢

「……………夢想封印!!」

ドオン!!

紫霊夢

「……………はあ？何でアンタが生きてんのよ……………っ！」

霊夢

「お生憎様！私は博麗の巫女よ？そう簡単に死ぬわけではないわ！」

紫霊夢

「あああああああああああつ!!どいつもこいつもウザいウザいウザいウザいウザいウザい
いつ!!」

紫霊夢

「……全員殺す……つ!!」

霊夢

「……凶からこれを受け取ってきたわ……」

御札を渡される

のびる

「……こ、れは?」

霊夢

「凶の全部の力が詰まったものよ……」

のびる

「……そうですか……」

霊夢

「……勝ちましょう」

のびる

「もちろんです……!」

紫霊夢

「魔霊 夢想封印……!!!」

巨大な黒色の魔弾がこちらに向かってくる

のびる

「……よし、行くぞっ!!」

思い浮かべるのは、壮大なライドウォッチ……

グランドジオウのウォッチである

のびる

「……出ない……っ!!」

だが、いくらイメージしても出てこない
のびる

「……2人だけの力じゃ、無理か……?」

霊夢

「何言ってるのよ……アンタは、のびるは1人じゃないわよ」
のびる

「……霊夢さん」

アリス

「そうよ、私たちだって、いるのよ……?」

美鈴

「1人で無理なら2人で、2人で無理ならみんなでやればいいんです……!」
のびる

「……はい!」

みんなが肩に手を置く

そうして、イメージしていく

グランドジオウのウォッチを……

のびる

「出てきた……っ!!」

それをジカンギレードに装填する

ギレード

「フィニッシュタイム!!」

そうして、のびるは構える

あの破滅を導くであろう黒色の魔弾を止めるために

のびる

「……今っ!!」

ギレード

「グランドジオウ!ギリギリスラッシュユ!!」

凄まじい破壊力のエネルギー刃が、魔弾と衝突する

拮抗はしなかった

あつという間に魔弾を切り裂き、紫霊夢の元へとたどり着く

紫霊夢

「……は、速い……!?!」

紫霊夢は対抗しようと手を尽くすが、全てを無効化されていく

紫霊夢

「なん、で……!!?」

のびる

「強いでしょ?……僕だけの力じゃない、皆の力が、想いが、その一撃に乗っているからね……!!」

紫霊夢

「……っ!!」

直後に、爆発が起きた

見てみると、落下していく紫……いや、青霊夢が見えたのびる

「……?」

色が変わっている事に疑問を覚えたが、落ちたら痛いだろうということを受け止めに
行く

ガシッ

のびる

「……大丈夫?」

青霊夢

「なんで……私を助けたの……?」

のびる

「……とある人が言ってたんだ。『手が届くのに手を伸ばさなかつたら、絶対後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ』って。だから僕も、手を伸ばした。それだけだよ」

青霊夢

「……ありが、とう」

青霊夢は気絶した
感謝の言葉を述べて

ヒヤッハー!宴会じゃあー!!①

あれから1ヶ月

永遠亭に入院し、無事怪我を治したのびるだったが
その入院生活はなんだか大変だった

初めの1日で美鈴とアリスが退院します

その後2週間くらいで赤青霊夢が退院します

その1日後に魔理沙と凶が退院します

それで最後に残ったのびるを見舞いに毎日誰かしらが来ます

入院生活2日目
のびる

「……えーと、アリスさん?毎日毎日見舞いに来なくてもいいんですよ?」
アリス

「……あの時あなたが庇ってくれなかったら死んでたから、これくらいは当たり前よ……でも、なんであなたの隣に異変の首謀者が居るのかしらねえ……？」

青霊夢

「……知らないわ」

のびる

「……あのー、僕を挟んで睨み合いはやめてもらっても……」

アリス

「……あなたもこんな危なっかしい人の隣で寝るのは嫌よね？」

のびる

「……あ、いや別に今はおかしくなってるわけでも無いですし、別に危険ってわけ

じゃ……」

青霊夢

「ほら、そいつは私と一緒に病室でいいって言ってるわよ？」

のびる

「そんな事一言もい……私の事、嫌いなのかしら……？」イエソナコトゴザ

イマセン」

アリス

「……っ!」

青霊夢

「……っ!」

再び睨み合う2人

のびる

「……困ったなあ」

諦めて天井を見るのびるだった

そんな事を毎日続け、退院する日になると
のびる

「……あの、1人で歩けますから……!」

アリス

「倒れたら折れるかもしれないから支えてあげる」

青霊夢

「確実に転ばないように支えといてあげるから、安心して歩きなさい?」

「宴会?」

霊夢

「そう。異変解決したから宴会やるの」

凶

「面白そうじゃねえか!」

魔理沙

「宴会は楽しいぞおー!?!」

ちなみにのびるの隣には青霊夢とアリスが居た

のびる

「……とりあえず腕を離してもらっても「嫌」……そうですか」
項垂れるのびる

魔理沙

「よっしゃ、それじゃ宴会の準備しねえとな!」

凶

「よっしやあ！心が踊るぜえ！」

のびる

「凶、それパラド……って、僕も準備しようっと」

凶

「まーまー、怪我人は大人しくしとけて！俺らでやっどくからよ！」
と、さささっで行ってしまった

ヒヤッハー!宴会じゃあー!!②

宴会の準備を終え、縁側に座り一息つく凶

凶

「ふい〜」

凶

「にしてもあいつ大丈夫かね? ベツタリくつつかれてるし・・・」

凶

「まあ俺はあいつがヤバいことになってるのを見るのが好きだからいいけどなWWW」

魔理沙

「おーっす、そつちも終わったみたいだな!」

魔理沙が隣に座ってくる

凶

「お、魔理沙。お前も終わったのか」

魔理沙

「ああ!・・・で、あいつは今どうなってるんだ・・・?」

凶

「ああwwwのびるの事かwwwwww」

魔理沙

「お前笑いすぎだろ（笑）」

凶

「いやーあいつは今2人に連れられてどっか行ってるよwwwwww」

魔理沙

「マジ!?うわぁ・・・凄く見たい・・・!!」

凶

「何が起きてんだろぅなあ・・・wwwwww」

1時間後、のびるは少しやつれた顔で戻ってきた

凶

「おーwwwwww何があった? wwwwww」

のびる

「いや……何も無いよ……?」

凶

「嘘つけwwwそんな顔で何も無かった訳がねえだろwww」
のびる

「いや、ほんとに何も無かったよ……!」

凶

「……ふむ、そこまで言うなら何も無かったんだろうなあ……ツマンネ」
のびる

「……何か言った?」

凶

「いや、何も言っていないぜ?」

のびる

「そう……」

凶

「つーかアリスと青い霊夢は?」

のびる

「少し買ってくるものがあるってどっか行ったよ？」

凶

「そうか……」

凶

『あの様子の2人がのびるを手放すなんて……何があつたんだ……？』

そんな2人の様子を物陰から見ていた人がいた

霊夢

「……」

赤い方の霊夢である

霊夢

『……何かしらね、この気持ち。女に挟まれてるのびるを見てると胸がザワついてくるのよね……！』

霊夢

『反面、女に挟まれてないのを見るとホッとするのよね』

霊夢

『私一体どうしたのかしら・・・?』

モヤモヤとした気持ちを抱えながらその場を後にする霊夢

魔理沙

「こっちの霊夢も中々面白い事になってそうだな・・・w w」

そうして夜になり、宴会が始まった

外から来た人と話そうと、2人に人が押しかける

ワーワー

ケツコウイイカオシテルジャナイ

ナンカオモシロイコトシロヨ

サンパイハモリヤジンジャー!!

のびる

「・・・うわわ、そんなに一気に来られちゃ返せませんよおー!」

凶

「はっはっは! 幻想郷はおもしろえなあ!!」

質問やら何やらがドバっとくる

もちろん聖徳太子ではないので、全部聞き取るなど不可能だ
のびる

「……………んぐつ!」

その時、誰かから酒が押し込まれた
のびる

「……………ぷはあつ!いきなり誰ですか……………」

霊夢

「……………お酒のみなさいよおー!!」

のびる

「霊夢さん!……………うわつ、お酒臭つ!」

霊夢

「……………女の子に向かって酒臭いなんてひつれいねえ!!」

のびる

「うわらば!うわつ!無理矢理お酒飲ませようもんぐつ……………!!」

強引に酒を飲ませる霊夢

のびる

「・・・あたまが、おかしくなりそう・・・くらくらする・・・」
一気に飲んで少し倒れるのびる

その後の記憶は無いという

ヒヤッハー!宴会じゃあー!!③

翌日

目を覚ます

のびる

「頭……痛い……」

頭を抱えながら周りを見ると

のびる

「……ええ?」

女の子たちが周りで寝ていたのだ

のびる

「な、何で……?」

しかも片方には霊夢ががっしりと腕を掴んでおり、上には美鈴が、そしてもう片方に

は妖夢がいた

魔理沙

「ん、んあ……っ」

のびる

「ま、魔理沙さん……！こ、これは一体……!?」

魔理沙

「……あー、それかあ……」

魔理沙

「昨日のお前凄かったぜ……?」

のびるの顔が青くなる

魔理沙

「昨日な……」

のびる

「……あ、危ないれすよお〜?」

転びかけた早苗を抱きとめた

早苗

「ひゃっ!……あ、ありがとう〜ございます」

のびる

「いいってことですよお〜」

美鈴

「わ、わわっ!」

のびる

「危ないよ〜美鈴〜」

他の人に押されて倒れそうになった美鈴を支えたり（胸に触れながら）

美鈴

「ひゃん!あ、ありがとう……よ、呼び捨てですか……?」

のびる

「……あれ、ダメだった……？」

美鈴

「だ、ダメではないですけど……！」

のびる

「じゃあ、美鈴でいいじゃん」

美鈴

「あ……はい、それでいいですよ……」シュー

半ば口説きみたいなのをしているのびる

魔理沙

「……あいつ大丈夫か？」

凶

「んまー大丈夫なんじゃね？（十中八九後ろから刺されるなwwwwww）」

ヒュオッ

魔理沙

「……あ、帽子が、飛んでった……！」

風が吹き、帽子が飛んでいく

のびる

「……よーいしょっ」

少し飛んで帽子を取るのびる

のびる

「ほらあく帽子く取ったよお」

魔理沙

「あ、ああ、サンキューな……!」

魔理沙

『おいおい、こいつ酒飲んでもほぼ変わってねえ……いや、少し口説きみたいな事言ってるから少しは変わってるのか……?』

凶

「いやしくしかしいつは変わらねえな……素の状態がもう本質ってわけか……」

魔理沙

「酔ってても人を助けるとか……あいつは聖人か何かか?」

凶

「さあなあくまあでもこれで面白いことが起こるかもしれないねえから、俺的にはありがたいがなあ!」

魔理沙

「お前も変わんねえのなw」

凶

「とおぜんよお！」

て、ういかいつの間に酔ったんだコイツ

霊夢

「……のびるうゝ一緒に飲みましょ〜？」

のびる

「おー霊夢ちゃん！いいよおゝ飲もう飲もう〜！」

霊夢

「……んぐつ」

のびる

「おー霊夢ちゃんいい飲みっぷりだあ〜！」

霊夢が少し酒を口に含む
そしてそのまま

霊夢

「……んっ」

のびる

「……んくっ」

口移しした

のびる

「……え？」

ヒヤツハー！・宴会じやあー！！④

時間が止まった

そして、少し経って

魔理沙

「ひゅ〜っ！霊夢のやつ、やりやがったなあ！」

凶

「すっげ、俺生の口移しなんて見たことねえよ！！」

妖夢

「……は？」

美鈴

「……へえ？」

歓喜と少しの病みが混ざった声が出る

のびる

「……アラー! (ドナ○ド風)」

ドサツ

霊夢

「ちよつとこのびるうゝ大丈夫?」

のびるがぶっ倒れた

魔理沙

「あいつ、考えるのをやめたな」

凶

「つーかなんでドナ○ド?」

魔理沙

「あ、そうだ」

魔理沙

「おい霊夢うゝ! その倒れたやつ運んでやれよおゝ!」

霊夢

「わあくかったわよお」

霊夢が嬉しそうな顔でのびるを神社内まで持つていった

凶

「すっげー嬉しそうな顔してたなあw」

魔理沙

「ああ。でもそこの2人はすげえ黒いオーラが出てっけどなw」

妖夢&美鈴

「.....」

幽々子

「あらあら今の妖夢ちゃんならオーラだけで人を殺せそうねえ」

少し笑いながら言う幽々子

霊夢は布団にのびるを寝かせる

霊夢

「…………ふふっ」

顔を撫でながら笑う

のびる

「…………っ」

少し安心したような顔になるのびる

霊夢はそれを見て得体のしれない愛おしさが湧いてくる

のびる

「…………霊、夢」

寝言を言い、手を伸ばすのびる

霊夢はその手を優しく掴む

のびる

「……まも、るよ。絶対……」

その瞬間、霊夢のタガが外れた

魔理沙

「何やってんだあいつ……」

凶

「天然のタラシなんじゃねえの？」

魔理沙

「無自覚タラシとか1番タチ悪いやつじゃねえか」

魔理沙

「つか後ろで黒いオーラ出してるやつら止めなくていいのか?」

凶

「止める必要ねえよ。あいつの自業自得だからな」

魔理沙

「一応友達なのにひでえなお前w」

凶

「はあ?友達だからってあんなおもしれえ事になりそうなやつを止めたりするわけねえ

だろwwwwww」

魔理沙

「……まあ確かにそうだなwwww」

これをのびるが聞いていたらブチギレるのは確実のようだ

霊夢

「……はあ……はあ……」
なんかヤバいことになっている霊夢

霊夢

「……あはっ、頂きまー」

ヒュオツ

と、霊夢の顔の顔を刀が
霊夢の後ろの方を蹴りが襲う

魔理沙

「あいつら行動早いな」

凶

「チツ、もうちよつとだったのによお！」

魔理沙

「つーか私たち避難しねえとやばくねえ？」

凶

「いや、俺はこの面白そうなものを目に焼き付けてから避難するぜ！」

魔理沙

「……仕方ねえ！私も目に焼きつけるぜ！」

凶

「おっ！それでこそ魔理沙！」

霊夢

「何の用かしら・・・？」

妖夢

「のびるくんから離れてください」

美鈴

「離れないと当てますよ・・・？」

霊夢

「アンタたちみたいな弱いのが2人集まった所で私に勝てると思っ
ているのかしらね？」

妖夢

「ええ、勝てますとも」

美鈴

「つと、その前にその方から離れてくださいね・・・？」

凶

「やべえなこの空気ww」

魔理沙

「・・・面白くなってきたぜww」

ヒヤツハー！・宴会じやあー！！⑤

凶

「ちよ、あれヤバくね？」

魔理沙

「何とか止めないとヤバいことになるな……」

凶

「そ、そうだ！やれるかどうか知らんがやってみるか……！」

魔理沙

「……何しようとしてんだ？」

凶

「ん？鎖出そうとしてんの」

魔理沙

「出来るのか？」

凶

「わからん。とりあえずやってみるわ」

3人が火花を散らしている時

その周りから魔法陣「波紋だ!」……波紋が出現し、その中から鎖が出てきて3人を縛る

3人

「……なっ!?!」

凶

「流石にやべえから止めさせてもらったぜ?」

魔理沙

「すげえ……マジで出しやがった……!」

3人は魔理凶を睨む

魔理沙

「おいおい、睨むなよ……！」

凶

「そうそう。俺らは神社を守っただけだからな。そいつは自由に使ってもらって構わん」

魔理沙

「……なんかあいつ可哀想だな……自業自得だけだな」

凶に見捨てられるのびるを憐れむ魔理沙

いい子かな？

凶

「んまーとりあえず神社と宴会を壊さん程度にやってくれ」

魔理沙

「さて、お邪魔な私たちは去るとするか」

スタスタと離れていく魔理凶

と、思ったらさっきの場所に戻り、また観察する

凶

「おい魔理沙、お前去るとか言っておきながら観察すんのかい！」

魔理沙

「いや、だつて気になるし……」

凶

「まあ俺も気になるからいいか……」

そして結局、のびるは3人と寝た（意味深）

魔理沙

「いや、さつきまでは起きてたぜ? だけど昨日の出来事をきかせたらショートしてまた寝ちまったぜ☆」

魔理沙

「やっちゃったぜ☆」

「やっちゃったぜじゃないでしょう!」

凶

「はっはっは、まあいいんじゃないか? どーせまたすぐに起きるさ」

魔理沙

「ま、そうだな・・・つと、私はもう一眠りするぜ・・・おやすみ」

凶

「おう、おやすみ!」

凶はのびるの寝ている顔を見ながら

凶

「のびる、お前絶対刺されんぞ W W W W W W W W W W」

愉快そうに笑った

凶

「さーで、俺ももう一眠りするかあ・・・」

そう言つて、凶もまた眠りにつくのであつた

霊夢

「・・・んん?」

霊夢は隣で寝ているアホの顔を見る

霊夢

「…………ふふっ」

霊夢

「…………ちゅっ」

霊夢

「…………大好きよ、のびる」

なんで霊夢は落ちたのか

魔理沙

「あーそーいやさ」

凶

「ああん？」

魔理沙

「のびるはどうやって霊夢を仕留めたんだ？」

凶

「仕留めたあ!?!? . . . まあ合ってつか . . .」

魔理沙

「その瞬間を見てねえから、是非聞きたくてなw」

凶

「ふむ . . .」

凶

「意識するきつかけになったのはあの時の俺らの茶化しだと思うんだ」

魔理沙

「ああ．．．針が飛んできた時のアレか．．．」

凶

「そうそう」

凶

「んで、あの異変終わりに永遠亭に行ったやん」

魔理沙

「ああ．．．その道中になんかあったんだな？」

凶

「察しが良くて助かるぜ」

凶

「その道中で霊夢が野良妖怪の攻撃に反応できなくて食らいそうになったのを、霊夢が抱えていたのびるが庇ったのよ」

魔理沙

「．．．んーと、大体分かったがもうちつと詳細に言ってくれ」

凶

「OK」

凶

「……異変終わった後、美鈴が青霊夢と俺抱えて、アリスが魔理沙抱えて、霊夢がのびる抱えてたんよね」

魔理沙

「ふむふむ」

凶

「んで、霊夢はボロボロの状態でのびる抱えてた訳よ」

魔理沙

「よくボロボロの状態でのびる抱えてられんな、あいつ」

凶

「まああれだけの戦闘があったわけだから、霊夢の反応力が落ちてても仕方ねえわけよな」

魔理沙

「まーボロボロだしな。逆に反応力上がってたら怖いわ」

凶

「んで、途中野良妖怪が出てきたんだけども、そいつが霊夢狙って攻撃してきたんよね」

魔理沙

「普通の状態なら瞬殺だけど、当時の霊夢じゃヤバかったと」

凶

「こそ。反応が遅れた霊夢が危ないって思ったのか、のびるがボロボロの状態で霊夢を庇ったんよww」

魔理沙

「……あいつは死ぬ気か……？」

凶

「それは知らねえけど、そつからだな、霊夢の様子がおかしくなり始めたのは」

魔理沙

「具体的にどんな感じでおかしくなったんだ？」

凶

「なんか凄くのびるを見るようになったのと、ハイライトがたまに無くなってたんだよなwwwwww」

魔理沙

「結構分かりやすくおかしくなったな」

凶

「そうなんだよなあ．．．んで、アレに至ると」

魔理沙

「ほうほう．．．感想としては、のびるは自殺願望があるのか？つて事だな」

凶

「まーあいつ外にいた時もヤバかったしな。いじめられっ子を守ろうとしてその子の代わりに殴られたり」

魔理沙

「．．．行い自体はいい筈なんだが、すげえ心配になるなあ」

凶

「後は自殺しようとしてたやつの手を掴んで自殺阻止したり」

魔理沙

「．．．聖人君子かなんかか？」

凶

「その事を一度突っ込んだらさ、あいつなんて言ったと思う？」

魔理沙

「なんて言ったんだよ？」

凶

「『僕は僕のできることをやってるだけだよ』だつてよ！……仮面ライダーに影響されすぎなんだよなあ……」

魔理沙

「うわあ……聖人君子だわあ……そして絶対自分の行いで死ぬタイプの人間だわ」

凶

「……俺は誰かに刺されて死ぬ方かな……」

魔理沙

「あーそれもありそう」

魔理沙

「……まーとりあえず経緯はわかったわ！サンキュー凶！」

凶

「ああ！」

なんか霊夢がベタベタしてくるんですけど

のびる

「……んむ?」

のびるが目を覚ますと、口が柔らかいもので塞がれていた

霊夢

「……んっ」

霊夢の口である

のびる

『ワースァイコーダナー（棒読み）』

のびるはそんな事を思いながら、キスが終わるのを待っていた

凶

「朝からお熱いこつて」

魔理沙

「・・・なんかこつちまで恥ずかしくなるな」

凶

「・・・俺は恥ずかしいより面白い、だなww」

霊夢

「・・・んう・・・おはよ、のびる」

とろんとした目で言う

のびる

「あつ、ああ、お、おはようございます．．．?」

体を震わせながら言うのびる

で、その直後、逃れようとしたが、手首を押さえつけられていたため、逃れられなかった

霊夢

「．．．．ねえ、なんで逃げようとしたの?」

のびる

「．．．．え、あ、え」

霊夢

「逃げようとしなくて．．．離れていたら絶対傷つくから．．．もうあんな事させたくない．．．．」

のびる

「わ、分かりました．．．．」

霊夢

「今、分かったって言ったわね?」

のびる

「えっ、ええ……」

霊夢

「……絶対に私から離れないでね？いつどんな時でも、絶対に……ね？」
ハイライトが休暇を取ってしまったようです

のびる

「はっ、はい……」

恐ろしすぎてつい反射的に言ってしまったのびるであった

凶

「あれ、これ霊夢ルート確定か……？」

魔理沙

「いや、まだ分からないんだぜ。美鈴とか、妖夢とかいるじゃないか……もしかしたら奪うかも知れないぜ？」

凶

「……修羅場になるな W W W」

それから今日はというと、ずっと霊夢がついてくるようになった腕を絡ませたりして、ずっと離れなかった

のびる

「……」頭を抱える

霊夢

「……」ニコニコ

外に出るにも霊夢がついてくるものだから、人里でかなり見られてしまうことに頭を

「……どうして赤いのと腕を組んでいるのかしら」
のびる

『わー見られちゃいけない人に見られてしまった……!』

青霊夢

「ちよつと聞いているの……?」

パチイン

と、のびるの肩に触れそうになるのを霊夢が止める

青霊夢

「何の真似かしら……赤いの」

霊夢

「……後から出てきたくせに私のこのびるを奪おうとしてんじゃないわよ……青い
くせに」

のびる

『……あー空が青いなあ……』

同一人物が火花を散らす中、のびるは現実逃避をしていた

魔理沙
「……もしかしてあん時の霊夢か？」

凶

「そうだな」

魔理沙

「なんでこつち側にいるんだよ……あっ（察し）」

凶

「そう、お前が今察した通りだ」

魔理沙

「……やっぱあいつバカだわ」

凶

「そりゃーいつもの事だろ」

魔理沙

「それもそうだなww」

凶

「しかしこの修羅場、どうなるんかねえ W W」

魔理沙

「楽しみだな W W」

のびる争奪戦!前編!

凶

「チキチキ!のびる争奪戦〜!」

魔理沙

「わー!!」

のびる

「……なんか始まったんだけども、僕はどうしたらいいんだろう……」

いつの間にか言い合っていた霊夢たちがのびるから離れていた

凶

「では、争奪戦のルールと、選手の紹介を始めます。あ、申し遅れました、私、実況の『3度の飯より愉悦が大好き』凶と」

魔理沙

「解説の『普通の魔法使い』魔理沙です」

霊夢たちを少し見ていたら解説、実況の席と、観客席が出来ていたのびる

「……そんなのどっから出てきたの？」

凶

「我は愉悦の為なら能力の制限なぞ破壊していくのさ……」

凶

「言うなれば制限の破壊者だな……」

のびる

「世界の破壊者みたいに言うんじゃない」

魔理沙

「えーバカ共は放っておいて、ルールの説明をします」

魔理沙

「ルールは簡単。のびるを誰が早く撃墜するか、です」

魔理沙

「最初に撃墜したものに『のびるを1日好きにできる権』を与えます」

即席会場がざわめく

ざわ……

ざわざわ……

ざわ……

のびる

「ざわめき方がカイジい！」

凶

「それでは、選手の紹介です！」

のびるがふと霊夢たちがいた所を見ると、新たに3人が追加されていたのびる

「……ちよ、なんかf「まずは博麗の巫女！博麗霊夢!!」無視……」

魔理沙

「まー霊夢は最強だからな！速攻で潰してくるだろうぜ！のびるドンマイ笑」

霊夢

「……負けない！」

凶

「次にイ！マイタイプラザーズXXでも使ったのかあ!?!博麗霊夢（青）オ!!」

魔理沙

「……どっちの霊夢も応援してるぜー！」

青霊夢

「赤い人には絶対負けない!!」

凶

「更にイ!ここで追加の選手です!!紅魔館の居眠り門番!紅美鈴ー!!」

魔理沙

「……一度勝ったとはいえ、アリスとの共同だったのと、頭がおかしくなっていたからな!のびるは負けるだろうぜ!」

美鈴

「私が権を頂きます!……って、居眠り門番って言わないでください!!」

凶

「続いてエ!七色の人形使いアリス・マーガトロイドオ!!」

魔理沙

「アリスの人形を使った攻撃は密度が凄いからのびるは負けるだろうな!」

アリス

「勝つわよ、上海、蓬萊!」

上海

「シャンハイ」

蓬萊

「ホラーイ」

凶

「更に更にイ! 斬れぬものなどあんまりない!? 白玉楼の庭師兼剣士イ! 魂魄妖夢ウ!!」

魔理沙

「妖夢の剣の腕は中々に高いから、立ち回りが悪ければ負けるだろうな!」

妖夢

「……こんな後から出てきた人たちに負けない!」

凶

「そしてエ! 本日と言わず毎日の被害者ア!! 大平のびるウ!」

魔理沙

「あいつらを相手にして勝てる未来が見えんなあ……」

のびる

「……勝利条件聞いてない……つてか帰りたい……」

魔理沙

「……と、のびる側の勝利条件を言っただけだったので言いますが! のびるは選手5人

を全員倒せば勝利です！」

のびる

「無理ゲーすぎるー!!!」

凶

「このステージの設営を手助けしてくれた紅魔館の皆さん、ありがとうございます！」

レミリア

「こんな楽しそうな事、手伝うに決まってるじゃない」

のびる

「いつの間に仲良くなった!？」

凶

「宴会の時に少しな!・・・って事でのびる争奪戦の始まりだア!!!」

カーン!と始まりの合図が鳴る

のびる

「・・・ああー!!!もうやるしか無いのかあー!!!」

始まった瞬間、ものすごい弾幕がのびるを襲う!!

のびる

「うわあー!!僕の運命は僕が変えるー!!!」

果たして運命は変えられるのか!

のびる争奪戦！後編！

ガシヤコンブレイカー！

バ・コーン！

凶

「おおつとお!?ガシヤコンブレイカーを出したあ!!それを何に使うのかあ!」

魔理沙

「・・・んん?あれは・・・?」

のびる

「よし!!」

ガシヤット!!

マイティアクションXガシヤットを装填し、必殺待機状態にする

凶

「おおつ!?必殺技で對抗する気かあ!」

魔理沙

「・・・えっ!」

のびるはその状態のガシャコンプレイカーを弾幕の中に放る

そしてそれが弾幕に触れ爆発し、周りの弾幕も誘爆によって消していく

魔理沙

「……誘爆させやがった!!」

凶

「無駄に高い戦闘センスが炸裂ウ!これで一先ず生き延びたア!!」

そうしてのびるがホツとしている最中

美鈴

「……もらった!」

美鈴が背後から攻撃を仕掛けてくる

凶

「のびる大ピンチイ!」

魔理沙

「流石にあれは対応できねえだろ……」

凶

「勝者は美鈴に決まりかア!?!」

のびる

「……っつ!!」

メロンディフェンダー!!

美鈴

「えっ!?!」

ガァン!!

のびる

「くっ……!!」

のびるは瞬時にメロンディフェンダーを呼び出し、美鈴の攻撃を防ぐ

だが衝撃は通るため、その衝撃を軽減するためのびるはディフェンダーを離し、前転で前が出る

凶

「ふっ、防いだア!?!」

魔理沙

「……戦闘センス高すぎるだろ……!?!」

のびる

「……腕が、痺れる……っ!!」

凶

「美鈴の攻撃を防いだのびるは、どうするのかア!?」

魔理沙

「さっきの攻撃で腕が痺れているようだな．．．こりや捌くのは厳しくなるな」

のびるは美鈴から一旦離れようとそのまま走り出すが、妖夢とアリスが待ち構えていた

アリス

「．．．．残念だけど、あなたに避けることは出来ないわ!」

妖夢

「大人しくやられてくださいいっ!!」

後ろからアリスの弾幕が、前からは妖夢の剣が迫り来る

ガンガンセイバー!!

のびる

「．．．．こうだっ!!」

ガンガンセイバーを地面に刺し、それを踏み台にし飛ぶ

凶

「飛んだあつ!!そして2人の連携攻撃をかわしていくウ!．．．だが!飛んだ先にはW

霊夢と美鈴があーっ!!」

魔理沙

「これは万事休すか……!?」

W 霊夢

「合符!」

のびる

「……くっ!」

ふと後ろを見ると、美鈴もスペルカードを使用していた

美鈴

「虹符!」

のびる

「……くっそっ!」

そして下を見るときもう立て直したのか、妖夢とアリスの2人もスペルカードを使用していた

アリス

「操符!」

妖夢

「人符!」

のびる

「……………まだっ!まだ諦めるわけにはいかないんだっ!!」

メロンデیفエンダー!

バナスピアー!

美鈴に向かってバナスピアーを放とうとするが

W霊夢

「二重夢想!!」

2人で撃った夢想封印が来たり

美鈴

「彩虹の風鈴!!」

虹色の美しい弾がめっちゃ来たり

アリス

「乙女文楽!」

妖夢

「現世斬!」

合体弾幕が来たり

凶

「おおーっとおおー!!? いつの間にか体制を整えたアリスと妖夢が加わり、5人のスペルカードがのびるを襲うーっーっ!!!」

魔理沙

「……これは無理だな」

勝者、全員

のびる

「……嫌だ」

凶

「現実逃避は見苦しいぞ……おい魔理沙、こいつの頭を後ろに向けさせてやれ」

魔理沙

「……なんで私がやるんだよ。お前がやれよ……」

凶

「まーまー、俺の力じゃ絶対無理だからよ」

ソオーツ

ガシィ!

のびる

「ヒエツ」

魔理沙

「……おい、何逃げようとしてんだお前は」

魔理沙

「ほら、後ろ向けよ。最高に面白い光景が待ってるぜ?」

のびる

「僕にとつては地獄のような光景だよ……」

魔理沙が強制的に後ろを向かせ、頭を上げさせるのびる

「ぐえっ」

魔理沙

「ちゃんと見ろ」

のびる

「い、嫌だあ!!」

魔理沙

「……マスパブチコムゾ」

低い声で言われてビクツとなるのびる

のびる

「わ、分かったよ……」

魔理沙

「よろしく」

のびるはそーっと目を開けるとそこには

「……………」
「ニコオ」

ハイライトが消えた目で笑顔になっている5人だった
のびる

「……………はっ！」ピコーン

四コマ忍法刀！

凶

「ハアン？逃げさせねえぞ……………」

のびる

「は、離してくれー！！」

凶

「早くこいつを持ってってくれ」

「……………」コクリ

のびる

「ちよ、ちよつと待っててください！待って！助けて！待っててください！お願いします！！」
「だーめ♡」

のびる

「／（＾○＾）／オワタ」

そうして5人に連れていかれるのびる

凶

「・・・連れていかれたなあ」

魔理沙

「そうだなあ」

凶

「見に行くかあ・・・！」

魔理沙

「・・・面白そうだし行くかあ」

凶

「流石魔理沙！話がわかるなあ」

魔理沙

「当然だぜ」

凶

「そんじゃ行くかあ」

魔理沙

「おう」

その後、何が起きたのかは口に出して言えないですねえ

「そりやーわかるわ！」

凶

「それよりさあ……後ろ、つけられてんぞ？」

木陰や建物の影からのびるを監視するかのような視線を感じる凶
のびる

「……監視だつてさ」

凶

「……わーお、モテモテじゃねえか。よかつたな」
のびる

「良くないよ……」

のびるの生活はやばい事になりそうだ

崩壊した理想郷①

あの騒動から1ヶ月後

博麗神社

のびる

「……ちよ、ちよつとでいいから離れてくれないかな……?」

W 霊夢

「だめ。離さない」

のびる

「ええ……?」

魔理沙

「あー、そーいやさあ」

凶

「ん?」

魔理沙

「青霊夢ってどっから来たんだ？」

のびる

「あー確かに気になってたなあ……」

霊夢

「確かに。アンタどっから来たのよ？」

青霊夢

「……私はもう一つの幻想郷から来たのよ」

のびる

「……へえー」

魔理沙

「まーあんまり驚かねえな」

凶

「そりゃー霊夢がいるのは幻想郷しかねえもんな」

青霊夢

「……でも、もう帰れないわ」

霊夢

「……なんでよ？」

青霊夢

「……壊滅したのよ。私の所の幻想郷が」

4人

「はあ!？」

青霊夢

「……ある時、私の幻想郷に黒い霧みたいなヤツが来たのよ」

青霊夢

「そいつは人、神、妖怪……とにかく誰にでも取り憑いた。そして私も取り憑かれた」

青霊夢

「……そいつは取り憑いた者の能力を奪い、どんどん戦える者を減らしていった」

青霊夢

「私も能力を奪われたんだけど、それだけ飽き足らず私の体を支配した」

青霊夢

「……そして私は、体に乗っ取られたとはいえ、幻想郷を破壊してしまったのよ……」

青霊夢

「そして、幻想郷を破壊した後、そいつは別の幻想郷へ飛んだ……」

のびる

「もしかしてそれって」

青霊夢

「そう。マコトよ」

青霊夢

「あいつは今度は能力を奪わず、傀儡を増やそうと幻想郷の実力者たちや人を狂気化させていった」

青霊夢

「……でも、アンタたちのお陰でなんとかなった。私はまた、幻想郷を壊さずに済んだ。……ありがとう」

魔理沙

「……まーいいってことよ！」

霊夢

「アンタは何もしてないでしょうが！」

凶

「いやはや、まさかあの異変がなあ……」

青霊夢

「……許してくれて、ありがとう」

青霊夢

「……でも、なんであの時、私を助けたの……？」

のびる

「……」

霊夢

「あら、のびる聞かれてるわよ？」

のびる

「……えっ？あつ、ああ。ま、まあ、誰も死なずに解決できたし、みんなが笑えてい
るから、別に気にしなくていいんだよ」

のびる

「それに」

霊夢

「それに？」

のびる

「僕はあの時、助けたいって思ったから、助けたただけだよ。」

のびる

「あの時、手を掴まなかったら、絶対後悔してた。だから、僕は手を掴んだ事を後悔してないし、青霊夢と一緒に居てくれて嬉しいと思ってるよ」

「……………」

凶

「なあ」

のびる

「ん？」

凶

「お前さあ、フラグ建てないと気が済まねえの？」

魔理沙

「……………こいつに言ったって仕方ないぜ。だって本人にそんな気は全く無いんだから」

凶

「あつ、そつかあ……………」

のびる

「……………一体どうい……………うわっ!!」

青霊夢

「……嬉しい」

霊夢

「……羨ましい」

魔理沙

「やっぱバカだな」

凶

「だなあ……」

と、わいわいしていると

紫

「……霊夢、大変よ!!」

霊夢

「紫? どうしたのよ急に」

紫

「実はもう1つの幻想郷が・・・！」
「はあ!?!」

崩壊した理想郷②

紫

「．．．．．つて事なのよ。頼めるかしら？」

魔理沙

「話が長いぜ．．．．．もうちょつと掻い摘んで言ってくれ．．．．．」

凶

「よーするに『もう1つの幻想郷ぶっ壊してこい』つて話だろ？」

紫

「まあ、そういう事ね」

凶

「．．．．．んで？そっちのBBんっ！いつの間にかいたもう1人の紫はなんなんですかねえ．．．．．？」

紫

「．．．．．今なんつった？BB A？」

凶

「いや何でもないっす。それより言って、どうぞ」

紫

「……あなたが上から目線なのが凄く腹立つけど、まあいいわ。このもう一人の私はそっちの霊夢同様、こっちに来た私なのよ」

霊夢

「もう一つの幻想郷の事を知ってたのね……?」

霊夢が睨む

紫

「……霊夢、睨まないでくれるかしら……? 割と怖いから……」

のびる

「……霊夢さん、こっち向いて?」

霊夢

「……呼び捨て」

のびる

「……え?」

霊夢

「呼び捨てじゃなきゃ向かない」

のびる

「ええ………?」

少し肩を落とし、決心したかのように頭を上げる

のびる

「れ、霊夢?こつち向いて………?」

霊夢

「………何?」

のびる

「………霊夢は笑顔の方が合ってるよ?笑って笑って!」

笑顔で霊夢の頭を撫でつつ、頬へと手を伝わせる

霊夢

「………ちよ………くすぐったいわよ………」

霊夢が笑顔になる

魔理沙

「………私は何を見せられているんだ?」

凶

「………だんだん女の落とし方を分かってきたみたいだな感じするなコイツ」

凶

「つてかもう1人の紫話さないじゃねえか」

凶

「そんな物言わぬ屍みたいなもん持つてきて何したいんだ……?」

紫

「……はっ! いや、霊夢に彼氏ができて一瞬頭が飛んでたとかじゃないからね?」

魔理沙

『飛んでたな』

凶

「飛んでただろ……」

紫

「……飛んでないわよ!」

凶

「あーはいはい。ところで俺の質問に答えてくれるか?」

紫

「……まだ生きては居るわ。だけど私の幻想郷こに来るまでに力尽きてしまったみたいね……まあ妖怪は中々頑丈だから、放っておいても回復するわよ」

凶

「別の幻想郷とはいえ同じ自分なのにこの扱い……ひでえや」

紫

「いいえ、自分だから酷い扱いができるのよ」

魔理沙

「私は大事にするけどなあ……」

紫

「それは価値観の違いってやつよ」

のびる

「あ、もう一人で思い出したけど青霊夢はどうしたんだろう……」

チラツと横を見ると

青霊夢

「スー……スー……」

のびるの服をぎゅつとしながら寝ていた

のびる

「……」

それを見て、無言で頭を撫でるのびるであった

崩壊した理想郷③

凶

「……まーとりあえずそのもう1つの幻想郷にはどうやって行けばいいんだ？」

凶が紫に聞く

紫

「……この神社の奥に空間の裂け目があるわ。そこを潜ればもう1つ幻想郷に行けるはずよ」

凶

「ほうほう……結構近くにあるんだな……」

魔理沙

「つてかそんなに悠長に話してられんだろ……こつちの幻想郷が危ないんだろ？」

紫

「……ええ、そうね」

凶

「……つて事で戦力集めだな！」

魔理沙

「……今からあ!？」

凶

「いやだってあれだろ、前の異変みたいに出会った奴らを仲間にしていく訳にはいかなだろ」

魔理沙

「まあそうだけど……」

凶

「つー事で俺は紅魔館に行って腕の立つ奴を連れてくるわ」

魔理沙

「お前空飛べねーだろ？私が連れてってやるよ」

凶

「おっ、サンキュー！」

魔理沙の箒に乗り、紅魔館へ行く凶

残った人たちはというと

のびる

「僕たちはどうしよう……」

霊夢

「私たちも仲間集めにでも行きましようか」
のびる

「……そうだね」

青霊夢を紫に預け、2人で移動する

紫

「私はここで留守番……?」

その頃、魔理凶組は

魔理沙

「おっ、霧の湖が見えてきたな」

凶

「・・・やっぱ速いなあ」

魔理沙

「空を飛ばない奴からすれば速いだろうが、私にとってはこれが普通だぜ！」

凶

「・・・自慢かあ？」

魔理沙

「そうだぜ！」

凶

「・・・ほーん」

魔理沙

「・・・なんだよその声・・・ってあっはははははは!!くすぐるのはやめろっ!!落ちるぞっ!あっはははは!!」

くすぐった影響かグラグラと不安定になる筈

凶

「バカにした罰だよｗｗｗｗ」

魔理沙

「あっははははは!!悪かったからっ!はははは!!もうやめてくれ!!ははははは!!」

凶

「許そう」

くすぐりをやめる凶

魔理沙

「はあー．．．．はあー．．．．お前．．．．後で覚えとけよおー．．．．?」

凶

「はいはい。それより前見た方がいいぞお?」

魔理沙

「はっ．．．．!」

木が目前に迫っていた

魔理沙

「．．．．ほっ!」

ギリギリ回避する

凶

「中々やるなあー！」

魔理沙

「ふふん！当然だぜ！」

凶

「そうやってすぐ調子に乗るのは魔理沙の悪い癖だけだな」

魔理沙

「う、うるさい！箒から落とすぞ!？」

凶

「そ、それだけは勘弁してクレメンス！」

魔理沙

「．．．．．全く、これに懲りたら私をバカにするのはやめた方がいいぞ」

凶

「それは無理だろうなあ．．．いじりがあるしなwww」

魔理沙

「．．．．．落とすぞ？」

凶

「すみませندシタ」

魔理沙

「分かればよろしい」

魔理沙

「つと、紅魔館に着いたな」

凶

「さて、仲間集めと行きますか！」

崩壊した理想郷④

一方、霊夢とのびるは

霊夢

「……出てきたのはいいけど、どこに行こうかしらねえ」

のびる

「うーん……白玉楼はどうか……?」

霊夢

「……いえ、守矢神社に行きましょう」

のびる

「なんで!?!」

霊夢

「え?それはあれよ、妖夢と一緒に رفتら取られるかもしれないじゃない……」

聞こえないように呟く霊夢

のびる

「いや、あの、取られたりしませんでしたよ!?!」
だがぼつちり聞こえていた

霊夢

「聞こえてたの!?!」

のびる

「えっ、ええ……」

霊夢

「恥ずかしい……」

赤面する霊夢

のびる

「……なんか、ごめんなさい」

霊夢

「もう……!」

と、そんなやりとりをしていたら守矢神社に着いた

のびる

「ここが守矢神社．．．．」

霊夢

「早苗ー！居るー!?」

のびる

「ちよ、そんな大声で．．．！」「霊夢さん！どうしたんですか?」．．．ええ?」

早苗

「つて、あの時霊夢さんにキスされてた外来人の方!」

のびる

「．．．．ええ?」

のびる

「覚えられ方が．．．」ガツクリ

早苗

「えと、なんか、ごめんなさい．．．?」

のびる

「いや．．．大丈夫．．．」

早苗

「とつ、ところで！なんの為に来たんですか?」

空気が少し重くなったので、早苗が強引に話題を変える

霊夢

「……実は」

少女説明中……

少女説明中……

霊夢

「……と、言うわけなのよ」

早苗

「……もう1つの幻想郷！そして、もう1人の霊夢さん！」

目がキラキラし始める早苗

早苗

「是非連れて行ってください！」

ガッシ！と霊夢の手を握る早苗

霊夢

「ちよつと、痛いわよ……」

早苗

「あつ、すみません！」

パツと手を離す早苗

のびる

「……」

しれつと少し距離を取るのびる

霊夢

「なんで少し距離を取ってるのかしら……？」

のびる

「え？いや、別に深い意味は無いですけど……？」

早苗さんのあのテンションに圧倒されたようだ

霊夢

「……まあいいわ。それじゃあ早苗、行くわよ」

早苗

「はいー」

と、返事をした後、のびるの方を向く早苗

早苗

「……えっと、名前を聞いてませんでした……私は東風谷早苗と言います！この守矢神社の巫女をやってます！」

のびる

「あつ、えっと、僕は大平のびると言います。よろしくお願いします」

早苗

「のびるさんですね！よろしくお願いします！」

手を差し出す早苗

のびる

「あつ、どうも」

手を握るのびる

霊夢

「……………」

霊夢はその光景をハイライトの無い目で見ていた

霊夢

「さ、2人とも行くわよ」

のびる

「あつ、はい」

早苗

「はいー」

霊夢がのびるの手をぎゅつと掴んできた
のびる

「あの、霊夢s「霊夢」……霊夢？少し痛いんだけど……？」

霊夢

「……我慢しなさい」

霊夢

『このままじゃ早苗に狙われちゃうかもしれないわ……！』

崩壊した理想郷⑤

紅魔館 門

凶

「美鈴！オツスオツス」

美鈴

「えーとあなたは・・・禍月さん、でしたっけ？」

凶

「そーそー。のびるの友達の禍月さんですよーっと」

美鈴

「今日はどんな用事でここに？そしてのびるさんはどこにいるんですか？」

キヨロキヨロとのびるを探し始める美鈴

凶

「あー今はちと別行動中なんだ。とりあえず中に入れてくれないか？」

美鈴

「あっ、はい・・・」

魔理沙

「……………」

凶

「ん、おお、魔理沙。なんか顔が怒ってるぞ？」

魔理沙

「いや、別にそんな事無いんだぜ」

凶

「あーもしかしてあれか？無視されてイラついているとかか？」

魔理沙

「……………まあそんな感じだ。とりあえず紅魔館に入ろうぜ」

凶

「……………？」

いつもと反応が違うのを不思議がる凶だった

凶 「んー……どうしようか……?」

紅魔館の中に入り、誰を連れていくかを考える凶

美鈴

「……ところで、どうしたんですか?ここに来るの初めてじゃないですか」

凶

「いや、ちと異変があつてな。その異変解決の為の戦力集めをしているんだ」

美鈴

「そうなんですね……あれ?と、いうことはのびるさんも来る……?」

凶

「そうだよ」「お願いします!私を連れてってください!」……ガクガク揺らすなああ

ああアアアアア!!」

魔理沙

「……そろそろやめてやれ」

魔理沙の呆れた声で我に帰る美鈴

美鈴

「あつ、はい……すみませんでした……少し興奮してしまって……」

凶

「……いいって……ことよ」

頭の上でひよこが鳴いている……ような幻影が見える

魔理沙

「おつ、おい、大丈夫か!？」

凶

「……心配すんなって。少しくらくらしたただけだ」

魔理沙

「そ、そうか」

凶

『この反応……もしや俺に惚れている……?』

いつもと違う反応をする魔理沙に、こんな事を思う凶

凶

『……まーんなわけねーわな。自惚れ自惚れ』

フラグを建てていく凶。果たしてこれは折れるのか、回収されるのか

凶

『それに俺は、愛とか好きとかって言う言葉が嫌いだからな．．．』

レミリアの部屋

凶

「おーっす！レミリアー！いるかー!?」

結構デカい声で言う

レミリア

「いるわよ．．．そんな大きい声を出さないで頂戴．．．」

凶

「すまんすまん。で、レミリアよ」

レミリア

「何？もしかしてもう1つの幻想郷の事？」

凶

「おっ！よくわかったな！」

レミリア

「そりやあ嫌でもわかるわよ．．．凄く闇の気配がするもの．．．」

凶

「ほう。そんながわかるのか．．．」

レミリア

「まあ吸血鬼だからね．．．でも、流石にあの濃さではあんまり長く居られないわ．．．」

凶

「レミリア程の吸血鬼でもか？」

レミリア

「ええ．．．居られてもせいぜい3日くらいかしらね．．．」

凶

「じゃー俺とか魔理沙とかの人間はどのくらい居られるんだ？」

レミリア

「1時間くらいかしら．．．って、あなた、行く気？」

凶

「まーな。紫に頼まれたし、行かん訳にもいかんだろ」

レミリア

「……へえー」

凶

「そんで、今その幻想郷ぶっ壊しに行くための戦力集めしてんの」

レミリア

「ふむふむ……それで、私の力が必要になったから来たのね？」

凶

「まーそうだな。あとフランとか居てくれると助かるかもな」

レミリア

「ふむ……まあ何故か知らないけどフランが懐いてるし、あなたなら大丈夫でしょ。」

私もついて行くし」

凶

「よっしゃー！これで強力な戦力が仲間になったぞー！」

と、話をしていたら

バァン！

フラン

「あー！凶だあー！私と遊ぶために来てくれたのねー！」

凶

「……まー懐いてるとは言われたけどさ。弾幕ごっこでギリギリ勝っただけなんだよなあ……」

フラン

「凶！弾幕ごっこしましょー！いいでしょ!?!」

凶

「……むむむ、小さい子の頼みは聞かないといけないと婆ちゃんに言われたけれども

！」

フラン

「じゃーしましょー！」

すぐさま弾幕を撃ってくるフラン

凶

「それにしたって命の危険がある事まで聞けなんて言われてないんだよなあー！つ
!!!」

崩壊した理想郷⑥

凶

「うわぁーっ!!レミリア助けて!」

フランの放ってくる弾幕を避ける

レミリア

「そうなったフランを止めるのは面倒だから、あなたが勝つしかないわね」
半ば諦められている凶

凶

「・・・ええー?それは酷くねえ?」

レミリア

「ほら、そんな事言ってる暇があつたら避けなさい?」

凶

「ひょえーっ!ギリツギリイ!!」

頬に弾幕がかかる

凶

「ぬわあーっ!! たーすけてー!!」

フラン

「逃げてばっかですまんない!」

凶

「いやだつて戦う気で来てないしっ!?」

喋りながらも弾幕は回避できている

凶

『こないだフランと弾幕ごっこをした時にフランの癖が把握出来ててよかった……!』

凶

「……とつ、とりあえずこれでっ!」

ママさんの使うマジカルマスケツト銃を召喚し、放つ

フラン

「そんなので私は倒せないよー?」

弾丸を完全に見切り、華麗に躲していくフラン

凶

「……これじゃあ火力不足か」

ならばとマジカルマスケツト銃を消し、XANXUSの使う二挺拳銃を出し、それで

攻撃する

凶

「はっはー!! 憤怒の炎は出せなくてもチャージ状態のモンなら出せんだよおー!!」

フラン

「……っ!」

フランは辛うじて避けたが、その威力に口を歪める

フラン

「あはっ! その銃おもしろーい!! フランにもちよーだい!」

凶

「これは俺の武器じゃねえから無理!」

撃ったそばから消し、また次のチャージ状態の物呼び出す

フラン

「……でも、そんなに単調だどつまんなくなっちゃうよー?」

凶

「……そうだなあ。ならこれだな!」

閃光弾を投げ、破裂させる

瞬間、凄まじい光が周囲を包む

魔理沙

「うわまつぶし!!!」

美鈴

「きやつ!!」

2人が光で目をやられる中

咲夜

「……大丈夫ですか？お嬢様」

レミリア

「ええ……ありがとうございます。流石ね」

咲夜

「ありがとうございます」

いつの間にか居た咲夜がレミリアにサングラスを付けていた

フラン

「眩しい……っ!」

モロに受けたフランは目を瞑っていた

凶

「よっし!大成功だっ!」

レミリア

「何処がよ！」

凶

「怒ってる・・・？」

レミリア

「当たり前よっ!!」

凶

「・・・すみません」

少し頭を下げ、瞬時に頭を切り替える

凶

「とりあえず・・・行くか！」

再び二挺拳銃を出し、フランに向かって真っ直ぐ飛ぶ

凶

「行くぜ・・・っ！」

銃を消し、手元にある槍を出す

魔理沙

「あっ・・・あれって」

美鈴

「まさか……!!」

咲夜

「……そんな!？」

レミリア

「あれは……私の……!？」

凶

「神槍『スピア・ザ・グングニル』（劣化版）!!!」

そうして槍の持ち手の方で軽く小突いて、弾幕ごっこは終わりを迎えた

崩壊した理想郷⑦

博麗神社へと戻ったのびると凶

のびる

「それじゃ戦力も集まったしもう1つの幻想郷に行こうか……霊夢、痛いよ……」
「？」

のびるの体に結構強い力で抱きつく霊夢

霊夢

「……もうちよつと」

凶

「俺たちはイチヤイチャを見せつけられるためにここにいる訳ではないんだが
なあ……」

苦笑いを浮かべながら言う凶

美鈴

「霊夢さんばっかりずるいですー!!私もー!!」

と、のびるに抱きつく美鈴

のびる

「美鈴さんまで……」

早苗

「のびるさんってモテモテなんですねえ」

のびる

「うーん……そうなのかなあ（目逸らし）」

魔理沙

「イチヤイチャ……かあ……」

凶

「魔理沙？どした。急にそんな事言い出して」

魔理沙

「いつ、いや、何でもないんだぜっ！」

焦る魔理沙

レミリア

「あつちもこつちもイチヤイチャばかり……」

少し溜息をつきながら言うレミリア

そんな甘い空間を止めるかのように紫が言う

紫

「……イチヤイチャは後にして頂戴。さっきこののびる^バそうなの^カが言った通り、そろそろ幻想郷に突入してもらおうわ」

レミリア

「でも、そいつらただの人間には辛い環境じゃないの？」

紫

「そう。だからこれを持っていきなさい」

紫は札を渡す

凶

「なんだこの札？なんか特殊な力でもあんのか？」

紫

「何も無かったら渡さないわよ……。それは特殊な闇を払う札。これで2時間はあつちにいられるわ」

凶

「つー事はあれか。大体3時間くらいでカタをつけて来いって事か……」

紫

「そういう事ね。それにあの幻想郷は今のところ私と、そこに寝かせてるもう1人の私

の力で止めてるけど、それも長くは続かない。だからさっさと行かないと大変な事になる」

凶

「よし、とりあえず札も貰ったし、行くかあ！」

「おー！！」

もう1つの幻想郷

凶

「暗っ・・・」

のびる

「闇の……なんだっけ。それが濃いんだろうね」

フラン

「凄いですごーい！こんなに闇が充満してるー!!」

レミリア

「あんまりはしゃがないの。みつともない」

美鈴

「……これ、普通の人間じゃ長く耐えられませんね……」

少し煙そうな顔をする美鈴

霊夢

「まあ私は結界張れるからどうとでもなるけどね」

早苗

「私も、一応どうにかかりますね」

凶

「……とりあえず人を2手に分けよう」

のびる

「チーム分けh」「じゃあ私はこっち」「私はこっちにしますね!」……oh」

フラン

「私は凶と一緒に行く！」

凶

「……じゃあそうだな。俺と魔理沙が集めた人。あとのびると霊夢が集めた人のチームで行くか。美鈴はそっちでいいよ。人数もちょうど良くなるしな」

美鈴

「よろしくお願いしますね！」

のびる

「あつ、うん。よろしくね」

凶

「じゃあ俺たちは紅魔館方面に行ってみる。もしかしたら誰か生存者が居るかもしれない。のびるたちは博麗神社方面へ行ってくれ」

のびる

「OK」

凶

「よし、じゃあ解散！」

凶チーム

魔理沙、レミリア、フラン
のびるチーム

霊夢、美鈴、早苗

人里

凶

「……誰も生きてるやつはいない、か」

魔理沙

「活気があったのに……」

レミリア

「仕方ないわよ。ここまで闇の力が幻想郷全体に広がってちや、生存なんて無理よ」

フラン

「……なんだか不気味」

凶

「面白いや魔理沙、お前なんか今日おかしくねえか？」

レミリア

「凶だけに今日？面白くない洒落ね」

凶

「そんなつもりで言ったんじゃねえって……」

凶

「んで、実際なにかあったのか？」

魔理沙

「……何も無いぜ？いつも通りの魔法使い魔理沙さんだよ」

凶

「いつもならもつと元気に言うはずなのに、元気がない。つて事は何かがあったんだろ」

魔理沙

「何もないつて！気にしすぎだ！」

魔理沙

『……私の些細なところも見てるのか……って、何を考えてるんだ私は』

凶

「……そうか……まあ、言いたくなったら言ってくれ」

魔理沙

「……お、おう」

凶

『……いや、まさかなあ……？』

崩壊した理想郷⑧

一方その頃、のびるたちはというと

のびる

「……確かに僕は飛べないけど、流石に2人で運ぶ事は無かつたんじゃ……？」
霊夢と美鈴2人にのびるは運ばれていた

霊夢

「そうね。美鈴、離れなさい？のびるは私が運ぶから、ね？」

美鈴

「いやいや、霊夢さんこそ離してもらって結構ですよ。主戦力である霊夢さんに疲れが残ってしまつては大変ですからね……」

霊夢

「大丈夫よ。この程度で疲れが残つたりしないわよ」

美鈴

「もしかしたら、あの時みたいになるかもしれないよ……？」

霊夢

「……そんな事には2度とならないわ」

バチバチと火花が散る2人を見て溜息をつくのびるのびる

『……何か言いたいけど、何も言えない……』

早苗

「あはは……のびるさん、大変ですね……」

のびる

「……まあ、慣れてるので大丈夫だと思います……?」

早苗

「疑問形なんですけど……?」

のびる

「なんとかなりますよ……多分」

早苗

「やっぱり確信がないじゃないですか……」

2人して溜息をつく

そんな2人を見て嫉妬したのか

霊夢

「あら、五月蠅い蠅が1匹いるようね？」

美鈴

「本当ですね．．．潰しましょうか．．．」

と、そんな事を言う霊夢と美鈴

そしてすぐさま攻撃を仕掛ける2人

早苗

「ひええ．．．！のびるさん、ど、どうにかしてくれませんか．．．？」

なんとか避けつつ話す早苗

のびる

「どうにかしろと言われても．．．今の彼女たちが僕の言うことを聞いてくれるか．．．」

早苗

「そ、そんなあ．．．」

その時、のびるの頭に1つの案が思い浮かぶ

のびる

「．．．．．そうだ」

早苗

「どうしたんですか．．．．．？もしかしていい方法があるんですか．．．．．？」

のびる

「まあ、今思いついたんですけどね」

のびるはさらつと早苗に概要を説明する

早苗

「……結構恥ずかしくないですか？」

のびる

「……なんとかやってみますよ」

早苗

「……分かりました」

2人が話しているため、霊夢と美鈴の嫉妬と弾幕がさらに強くなる

霊夢

「へえ……ここまでやってもまだ懲りてないのね……」

美鈴

「これは本格的に潰さないとダメみたいですね……」

ハイライトが休暇を取ってしまったようです

のびる

「……霊夢、美鈴さん」

霊夢

「何？今忙しいんだけど・・・？」

美鈴

「五月蠅い蠅を落とさないといけませんから・・・ね」
のびる

『これは止めるためこれは止めるためこれは止めるため!!!』
シンジのような自己暗示で覚悟を決める
のびる

「・・・好きだよ、2人とも」

のびる

『あー言っちゃったよーもーどーでもいいやー』

霊夢

「・・・言ったわね？」

美鈴

「ちゃんと、聞きましたからね？」

霊夢、美鈴

「裏切ったら、許さないから・・・ね？」

「祝え！のびるの未来が確定した瞬間である！！
のびる

「……はい」

のびる

『……祝われても嬉しくないよ』

凶

「……なんかすげえ愉悦を見逃した気がする」

魔理沙

「お前、何言ってるんだ……？」

崩壊した理想郷⑨

なんとか収める事に成功したのびるだが、代償に未来が確定した……？

霊夢

「ふふふ……♪」

美鈴

「あはは……♪」

さらにベタベタとくつつくようになった霊夢と美鈴

のびる

『……Loveじゃなくてlikeの方とか言ったら半殺される気がする』

早苗

「……さつきより酷くなってる気がする」

そんなこんな色々やっていたら、博麗神社が見えてくる

のびる

「これは……」

霊夢

「ボロボロじゃない！」

美鈴

「ここまでボロボロになるなんて……」

焼け落ちたかのようなボロボロの博麗神社があった

早苗

「……あ、あれ……？あそこに倒れてるのって……!？」

霊夢

「何よ、何かあるの……っ!？」

のびる

「……早苗さんが、倒れてる……?」

早苗が駆け寄り、抱き起こす

早苗

「……気絶してる、だけ……?」

ホッと肩を下ろす早苗

霊夢

「……にしても、そっちの早苗はオレンジなのね」

美鈴

「あつ、確かにオレンジ色……」

のびる

「なんでオレンジ色なんだろう……?」

霊夢

「反対の色とかじゃないの?」

美鈴

「あるかも知れませんか……」

「……でふと、のびるは疑問に思った

のびる

「……ところで、なんで博麗神社に早苗さんがいたんだろう……?」

霊夢

「それは、暴走した青い私を止めるためとかじゃないの?」

美鈴

「割と普通の回答ですね……」

早苗

「……ところでこの私、どうしたらいいんでしょう」

のびる

「うーん、おぶつて連れていく?」

早苗

「ここに置いておくのも可哀想なので、そうしましょうか」

霊夢

「えー! 私は反対よ! 足でまといが増えるじゃない!」

美鈴

「私も賛成です。気絶してる人を連れて行って、いざという時に荷物になるのは分かりきってますから。もう一人の自分、という事で連れて行きたいのは分かりますが、デメリットが大きいので帰る時にまた連れていけば良いと思いますよ……?」

早苗

「……でも」

のびる

「流石にここに置いておくのは……」

駄々をこねる2人

霊夢ははあと溜息をつくと

霊夢

「……そんなに言うなら早苗、アンタが持つて行きなさい。その代わりに、足でまといにならないようにしなさいよ?」

しぶしぶと言った感じにOKを出す

美鈴

「霊夢さん、甘くないですか……?」

霊夢

「機嫌が良いってのもあるけど、1番の理由は私が持つてく訳じゃないって事ね」

美鈴

「……霊夢さんらしい理由ですね」

霊夢

「当然よ。なんで私がのびる以外を背負って行かなきゃならないのよ」

美鈴

「……それは同感です」

と、和気あいあい(?)としていたら

「……あらあ?まだ生きてる奴が居るなんて、ね」

喜びが含まれた声が聞こえた

霊夢

「……誰?!」

声が出た方に御札を投げる霊夢

「……つと、危ないわねえ?赤巫女さん?」

霊夢

「アンタは……幽々子……!!」

幽々子

「あらあら、やっぱり向こうの幻想郷とこにも私が居るのねえ」

ピンクの髪は黒に

衣服は紫に

目は虚ろになった幽々子が居た

崩壊した理想郷⑩

霊夢

「そういえば青いのの話だと能力は奪われたって聞いたわよ？今のアンタで私を倒せるのかしら……？」

幽々子

「嫌ねえ……ちゃんと戻して貰ったに決まってるじゃない……」

霊夢

「へえ……？」

幽々子

「それに……新しく能力も貰ったし……ね？」

瞬間

のびる

「……………ふつつつ!!!」

のびるが血を吐く

美鈴

「……え？」

霊夢

「何が、起こったの……？」

幽々子

「ふふっ……少し内蔵を破壊させて貰ったわ……？」

美鈴

「破壊……！妹様の能力……!?」

幽々子

「そうよお〜？流石は門番ねえ〜」

のびる

「……奪った能力を……他人に与えられるのか……っ!!」

幽々子

「……それにコピーもできるらしいけどねえ〜」

早苗

「なんですかそれ……！チートって奴じゃないですか……!!」

全員が戦慄していた時、ふと疑問に思ったのか、のびるが血を出しながら幽々子に質

問する

のびる

「……ところで、なんでここにいるの……?」

霊夢

「え?」

美鈴

「ええ?」

早苗

「えええ……?」

全員（幽々子含め）目が点になる

3人

「「それ今その状態で聞く!?!」」

3人からツツコミが入る

のびる

「あれ……ダメだった……?」

3人

「いやダメって訳じゃ……」

幽々子

「……流石にその質問は予想外だったわあ？」

霊夢

「……でもまあ気になっていたし、聞こうかしら。なんで神社に居るの!？」

幽々子

「あらあ？ そつちとは構造が違うのかしらねえ……？」

幽々子

「……そつちではどうかは知らないけど、神社のずっと後ろに冥界があるのよねえ」

幽々子

「それで私はここに近いからたまに見に来るのよねえ」

のびる

「……こんな半壊した神社を見に来てどうするんだろう」

美鈴

「それは確かに言えてますね……」

早苗

「流石にこんなにボロボロだと、来る意味あんまり無いような……？」

霊夢

「アンタたちねえ……そんなの決まってるじゃない……」

霊夢

「神様にお祈りしに来てるのよ！」

霊夢はドヤ顔で言うが、みんな呆気にとられていた

のびる

「……もう死んでる人が、神社に来る意味無いよね……？」

早苗

「それにもう神様なんてほぼ居ないみたいな風景してるのに……」

美鈴

「それにそれに、何の神様のご利益があるのかわからない神社にお祈りしに来ますかね……？それだったら守矢神社に行つた方が確実にご利益ありそうじゃないですか……？」

霊夢

「……」

全員からの反論に黙るしかない霊夢だった

一方その頃、凶たちはというと

凶

「……なんだあれ」

レミリア

「……どれよ」

魔理沙

「ひよつとしてアレじゃねえか？」

魔理沙が指差す所には、誰かが倒れていた

「そうそう」
凶

レミリア

「……紅魔館の後ろに建ってるあの変な黒い何かだと思ったわ」

凶

「まあそれも気になったけど、まずはこっちだな」

近づいてみる

フラン

「なんか服の色がフランに似てる」

凶

「確かになあ……って、あれ魔理沙の服じゃねえか？」

魔理沙

「……確かに」

レミリア

「つてアレ魔理沙でしょ！」

魔理沙

「……だよなあ」

凶

「とりあえず生きてるかどうかだけは確かめないとな……」

白い魔理沙を抱き起こし、脈があるかどうかを確かめる凶

凶

「血だらけだが、一応生きてるみたいだな」

フラン

「……美味しそうな血……少しくらいいいよね……?」

フランが白魔理沙の服に付いてる血を掬って舐めようとする

レミリア

「ちよつとフラン! 汚いわよ!」

フランを止めるレミリア

フラン

「冗談よ冗談。全く、お姉様は冗談も通じないのね」

レミリア

「……冗談だったらもうちよつとわかりやすいのになさいよ!」

フラン

「そんなのもわからないお姉様がダメなのよ」

少し涙目になるレミリア

凶

「……はいはい喧嘩すんなって」

さり気なくレミリアの頭を撫でる凶

フラン

「あつズルい！凶！私にもやってよ！」

凶

「わかったわかった」

フランの頭を撫でる

フラン

「……♪」

機嫌が良くなるフラン

魔理沙

「……むー」

凶

「なんだ魔理沙。もしかしてお前もやって欲しいのか？」

魔理沙

「そ、そんな事ない!!」

凶

「ツンデレかな？」

魔理沙

「そんなんじゃない！」

凶

「つたく．．．素直じゃねえなあ。やってって顔に書いてんだよなあ．．．」

魔理沙に近づき、帽子を取って頭を撫でる

魔理沙

「．．．．．気持ちいい」

と、白魔理沙の方をすっかり忘れてしまった凶であった

崩壊した理想郷①

博麗神社

幽々子

「……さて、排除といきましょうか」

空気が変わった

霊夢

「……っ」

のびる

「……先手必勝ってわけじゃないけど！」

ドラゴンロッドを出現させ、攻める

美鈴

「そんな体で突撃しても！」

幽々子

「そんな突撃、避けてくださいって言うてるようなものねえ」

のびるの突きは避けられ、右横から攻撃が入る

幽々子

「……っつ!?」

……はずだった

のびる

「誰も2本作れない、なんて言いましたっけ?」

もう1つドラゴンロッドを出し、それを当てようとする

幽々子

「……まあびつくりしたけど、止められないとは言つてないものねえ」

その突きを片手で止め、がら空きになった腹部に蹴りを放つ

のびる

「つくあ……っ!!」

上に浮かされる

幽々子

「……つと、そつちの相手もしないと、可哀想よねえ?」

落ちてきたのびるを蹴り飛ばし、霊夢たちの方へと向かう

橙早苗

「はいは……?」

霊夢

「……少し、厄介ね」

幽々子

「あら、博麗の巫女ともあろう霊夢が厄介と言うなんてねえ」

周りの物を破壊しながら近づく幽々子

美鈴

『……早く助けに行かないと……っ! あんな攻撃を受けた後じゃ……死ぬかもしれない!』

のびるを助けようとする美鈴だが、中々隙を見せない幽々子

周りを破壊しながら近づいているので、飛ばされた方向へと行くのが難しくなっていた

早苗

「避けるので精一杯……っ!」

破壊の能力が厄介なのと、殺されれば操られるということもあり中々攻められない
人

のびる

「……がふっ」

木にぶつかり、口から大量の血が出る

橙早苗

「……大丈夫ですか……?」

のびる

「……あれ、貴方は早苗さんにおぶられていた筈では……?」

橙早苗

「……気づいたらここに寝かせていたんです」

のびる

「そ、そうですか……『多分シリアルしてた時だろうなあ……』」

気づかなかったなあ、と思ったのびるだった

橙早苗

「……とりあえずじつとしていてくださいね。応急処置くらいはしますから……」

早苗さんの手がぼんやりと光り出す

のびる

「え、あ……ありがとうございます」

橙早苗

「……いえ、お礼を言うのはこっちの方です。気絶してた私を助けてくれてありがとうございます。うございました……」

のびる

「別に……普通の事をしたまでというか、助けたのは早苗さんというか……」

橙早苗

「……とにかく、ありがとうございます」

のびる

「いえ……」

と、話をしていると手の光が収まる

橙早苗

「応急処置、終わりました」

のびる

「あ……ありがとうございます。これで助けに行けます」

橙早苗

「応急処置ですから、少しでも休んでないとダメですよ……！」

起き上がろうとするのびるを橙早苗が手で遮る

のびる

「……いや、でも、ピンチみたいだし、行かなきゃ……っ」

橙早苗

「どうしてそこまで……！ 貴方は見たところそんなに強くないのに……！」

のびる

「……さあ、何時からかそんな癖がついちゃっただけだよ」

少し笑いながら言うのびる

橙早苗

「……貴方は死に急いでいるんですか？」

のびる

「……え？」

唐突な質問で驚く

橙早苗

「だってそうじゃないですか……こんなボロボロなのに、行こうとするなんて……
！死に行っているようにしか見えない……っ!!」

のびる

「はは……傍から見ればそうかもしれないね」

ゆっくり、立ち上がる

のびる

「でも、僕は死に急いでるわけじゃないよ？」

橙早苗

「だったら……そんな体で行くのを止めたらどうですか……?」

のびる

「……それは、ちよつと無理かもしれない……」

橙早苗

「そんなボロボロで、血も吐いてっ！少し治ったと思ったらまた行こうとするっ!!」

橙早苗

「いくら出会って数分だって、そんなの見過ごせるわけじゃないじゃないですか!!」

のびる

「……優しい人なんだね」

橙早苗

「……貴方に言われたくないです」

のびる

「……はは、遠回しに優しい人って言われちゃったよ」

のびる

「とりあえず、行かなきゃ……こんなところでだべってる場合じゃなかった」

そう言って駆け出すのびる

橙早苗

「……っ!」

一方、凶たちは

凶

「おーい、白魔理沙ー起きろー!」

ペチペチと白魔理沙の顔を叩く凶

白魔理沙

「……ん」

魔理沙

「お、起きたみたいだぞ」

白魔理沙

「……私の、顔……?」

白魔理沙

「……って、私い!?!」

魔理沙

「驚いてら」

凶

「そりゃー驚かねえわけねえわな」

レミリア

「・・・もしかしてもう一人の私もいたりして」

フラン

「お姉様って結構弱いからもう殺られてたりしてー」

レミリア

「フラン・・・？実の姉に向かってそれはないでしょう・・・？」

フラン

「いやでも私より弱いじゃない」

レミリア

「・・・凶に負けたくせに」

フラン

「手加減してただけだもん」

レミリア

「~~~~~!!!」

凶

「はいはい落ちつく「レミ、リア．．．!?」．．．どうした、白魔理沙」

白魔理沙

「どうしたって．．．!お前らそんな奴と一緒に行動してるって事はまさか．．．アイツらの仲間か!」

何と勘違いしたのか、急いで離れる白魔理沙

凶

「ちよ、白魔理沙、落ち着けよ!」

白魔理沙

「煩い! 黙れ幻想郷を滅ぼした奴らがあ!」

凶に向けてマジックミサイルを飛ばす白魔理沙

魔理沙

「．．．ありやー少し落ち着かせないといけないようだな」

凶

「．．．気乗りしねえが仕方ねえか」

凶

「．．．行くぜ魔理沙!」

魔理沙

「おう！」

錯乱した白魔理沙を止めるため、向かっていった

崩壊した理想郷⑫

白魔理沙

「つつ！マスタースパークツ！！」

凶

「開幕マスパは頭が悪いだろお!!」

初っ端からマスパを撃つ白魔理沙

横っ飛びで回避する

だが、こっちの方にも魔理沙が居るのだ

魔理沙

「誰が頭が悪いってえ!!?こっちもマスタースパークだ!!」

魔理沙がマスパで相殺しつつ、体制を立て直した凶がレミリア、フランに指示を出す

凶

「レミリア、フラン！白魔理沙に近づいてくれ！」

レミリア

「え?」

フラン

「それだけ？」

凶

「ああ。無駄に攻撃しちまうと錯乱してる白魔理沙がどんな行動をするかわかったもんじゃないからね。近づくだけ近づいて気を引いてくれ」

フラン

「・・・わかった！」

レミリア

「・・・そういう事ね！」

凶

「理解が早くて助かるぜ！」

魔理沙

「つち！私だから力も同じかつ！」

白魔理沙

「邪魔するなああああああああつ！！！！」

マジックミサイルを発射する

魔理沙

「頭に血が昇りすぎだぜ!!」

魔理沙もマジックミサイルで相殺する

と、その時

レミリア

「魔理沙ー!!」

レミリアとフランが来る

魔理沙

「レミリア!? こっちに來たら——」

白魔理沙

「レミリアアアアアアアアアアアアツ!!」

レミリアを見た瞬間、マスパを撃っていく

レミリア

「そんな直線的な攻撃、避けられるに決まってるじゃない!」

マスパを避けるレミリア

フラン

「あまりにも血が昇りすぎてて攻撃が単純になつてゐる……」
魔理沙

「ああ。まー私はお前らに当たらんように相殺させてたけども、あれくらいなら避けられるぜ」

フラン

「なんか言い方が言い訳っぽいよ？」

ジト目で魔理沙を見るフラン

魔理沙

「ほ、本当だからな!？」

フラン

「へえ〜？本当かなあ〜？」

凶

「はいはい駄弁つてる暇があつたら2人とも行動してくれ？あとフランはさつき言ったのにもう忘れたのかー？」

鎌を持った凶が錯乱した白魔理沙に突っ込む

フラン

「あつ、凶ごめん！」

魔理沙

「つて、私はどうすりゃいいんだよ！」

凶

「魔理沙は俺と一緒に来い！フランはさっき言った通りにな！」

フラン

「わかった！」

魔理沙

「わかった！」

白魔理沙

「ああああああああああ!!」

脳死でマスパを撃ちまくる白魔理沙

レミリア

「それじゃあ何度やつても当てられないわよ？」

凶が言った通り、攻撃せずにただ近づき、攻撃を躲すのみに留まっている

白魔理沙

「黙れ黙れッ!! お前だけは絶対殺すッ!!!」

更に錯乱し、マスパの威力を上げる白魔理沙

フラン

「お姉様くお待たせ〜」

レミリア

「やっと来たのねフラン。何してたのよ」

マスパを避けながら会話する

フラン

「ついつい魔理沙と話しちゃって……ごめんね!」

レミリア

「はぁ……フラン、私がどれだけ大変だと思ってるのよ……」

フラン

「え? 会話しながら避けられるって事はそんなに大変じゃないって事じゃないの?」

レミリア

「……まあそうだけど、それでも早く来るものじゃないの?」

フラン

「お姉様なら大丈夫って信じてたよー? (棒読み)」

レミリア

「……嘘をつかないの。あと棒読みもやめなさい」

フラン

「はいはい。とりあえず私も近づけばいいのよね？」

白魔理沙に近づくとフラン

白魔理沙

「レミリア2人に増えた!? だったら2人とも殺せばいいッ!!」

フラン

「あちゃーこれは重症だねー」

錯乱しすぎてレミリアとフランを見分けられない白魔理沙

そんな白魔理沙を見てクスクスと笑っているフラン

白魔理沙

「笑ってんじゃねえぞ!!!」

フランの方にも攻撃を仕掛けてくる白魔理沙

フラン

「……単調すぎくもうちよつと頭を使って攻撃してきてよく」

白魔理沙を煽るフラン

白魔理沙

「つるせえ!!」

さらに攻撃が強くなるが、ひよいひよいと避けていくフラン
フラン

「あはっ！これ面白い！」

レミリア

「・・・来たわね」

2人が白魔理沙の背後にそっと小走りで近づくと姿が見えた

凶

「よっしゃ行くぞ」

魔理沙

「OK」

凶は鎌を大きく振り上げ

そして魔理沙はミニ八卦炉を白魔理沙の頭上に向け
振り下ろした

ゴスツ

白魔理沙

「ぐはっ……」

鎌の持つてる部分と、単純にミニ八卦炉本体をぶつけるといふ普通の方法で止める

凶

「ねえねえ、今鎌の危ない部分でやると思った!? 残念持つてる部分でしたあく!!」

魔理沙

「お前誰にやってんだそれ……」

凶

「え? 読者の人だか?」

魔理沙

「メタ過ぎねえか？」

凶

「そんなん知らーん」

魔理沙

「はあ．．．．とりあえず錯乱した私は止まったな」

レミリア、フランも降りてきた

レミリア

「なんだか誤解を招く言い方ね」

魔理沙

「しゃーないだろ？これしか言い方が無かったんだからよ」

レミリア

「普通に白魔理沙って呼べばいいじゃない」

魔理沙

「私の名前の後ろに白って付けてもなんだか違和感感じるんだよ．．．」

レミリア

「んー．．．．そんなものなのかしら」

魔理沙

「お前にはわからんだろうがな」

と、2人で話し合っていると

フラン

「ねーねー！凶！頑張ったから頭撫でて！」

フランからなんだかヤバい発言が出てきた

凶

「えーまたかよ。フランや、少し自重と言う言葉を知ってくれねえか．．．？」

フラン

「えー！凶が撫でるのが上手いのが悪いんだもん！」

凶

「はあく．．．仕方ねえな。ほらよ」

わしやわしやと撫でてやる

フラン

「えへへへ♪」

嬉しそうにするフラン

凶

「ふー．．．ん？」

2人が撫でて欲しそうにこちらを見ている！

撫でますか？

はい↑

いいえ

凶

「・・・仕方ねえからはいで」

残りの少女の頭を撫でた！少女たちの機嫌がかなり良くなった！と、思う！

凶

「あやふやすぎるだろ・・・」

と、ほんわかとした一時が流れていた

が

崩壊した理想郷⑬

霊夢

「ほんとに厄介ね！」

早苗

「スペルカードすら使わせてくれないなんてっ……！」

美鈴

「……攻めきれない！」

幽々子はきっちり周囲を見ており、1人が囷になって引きつけて他の2人で倒そうとしても、2人の動きを見て、的確に捌いてから近距離で能力を発動し、倒す

3人一気にスペルカードを使おうとすると、発動前に1人潰され、盾として利用されるだけだった

そしてのびるを助けに向かおうものなら後ろから撃たれるので、助けられないままであつた

幽々子

「あら、3対1なのに私を倒せないのね〜？」

煽る幽々子

美鈴

「強さがでたらめなのが悪いんですよねえ……」

霊夢

「本当に、これはヤバくなってきたわね……」

と、2人が焦っている

早苗

「……え」

1人だけ素っ頓狂な声を上げた

ドオン！

幽々子

「……っ！」

どこからとも無く聞こえてきた何かを撃つ音

幽々子は手をすつと翳し、その飛んできた物を破壊する

と、中規模な爆発が起きる

幽々子

「・・・・・・・・ここまでのエネルギーがあるなんてっ！」

霊夢

「この爆発の大きさ・・・・・・・・ヤバい！」

美鈴

「何が起こってるんですか・・・・・・・・!?」

霊夢が美鈴と早苗の手を掴んで、やや後ろに離れる

幽々子も同様にやや離れる

早苗

「・・・・・・・・さつき、のびるさんが何か撃つてたのを、私見ました。多分そのせいだと思います」

ます

美鈴

「え・・・・・・・・?あの怪我で・・・・・・・・?」

霊夢

「・・・・・・・・いつか本当に死ぬんじゃないかしら、あいつ」

美鈴

「ちよ、ちよつと霊夢さん！縁起でも無いこと言わないでくださいよお！」

霊夢

「……そうね、悪かったわ」

美鈴

「全く、もう………つて、のびるさんは……？」

のびる

「つく……！」

ペガサスボウガンを持ち、膝をつくのびる

反動で少し口から血を出していた

橙早苗

「だから言ったのにつ！」

声を荒らげる橙早苗

のびる

「………とりあえず、気を引く事はできた、かな？」

内心反動が結構あるな、なんて呑気な事を考えていた

のびるのやった事は単純で、見えずらく、それでいて火力があるペガサスボウガンの
空気弾を幽々子に当てようとしたのだが、気づかれ破壊されたのだった

結果として封印エネルギーと破壊のエネルギーで中規模な爆発（破壊の爆発より一回
り大きいくらい）を起こして気を引けたので良かったようだが

幽々子

「へえ……？中々やるじゃない」

幽々子

「鬱陶しいから先に殺してあげる……」

霊夢

「ヤバイ……！」

美鈴

「あの状態じゃ……！」

早苗

「死ぬかもしれない……っ!!」

助けに行こうとする3人

のびる

「つく……っ!!」

ボウガンを構える

幽々子

「遠距離武器がこの近さで使えるとも思ってるのかしら……?」

のびる

「がはっ!」

蹴り上げられる

幽々子

「次は私の操り人形ねえ?」

手を、上に上げる

橙早苗

「秘術 グレイソーマタージ!!」

星型の弾幕が幽々子に向かってくる

幽々子

「……っ!!」

爆発が起き、爆風でさらに吹っ飛ばされるのびるのびる

「うわああああー！！！」

声を上げながら、持っていたペガサスボウガンを構え、引く

早苗

「のびるさんっ！」

のびる

「……早苗さん」

早苗

「あの時は死ぬかと思いましたよ……」

のびる

「……ごめんなさい……っていうか、なんであの2人じゃなくて早苗さんなんですか……? てつきり来るのはあの2人だと思ったんですけど」

早苗

「……私じゃ不満なんですか?」

少しムスツとなる早苗

のびる

「ああいや、そんな事はないんですけど、少し気になって」

早苗

「……戦力的にあの2人が幽々子さんと戦った方が良いかな、と思って私が来たんです。まあでも、凄く駄々をこねられましたけど、今言った事を言ったら渋々了承されました(汗)」

のびる

「ああ……そういう事ですか」

早苗

「そういう事です。と、いうことで応急処置しますからじつとして下さいね」

のびる

「あ、はい……」

すぐ行くのかと思っていたら処置するらしいのでビックリしたのびるだった

紅魔館付近

レミリア

「やっぱり私、か」

凶

「……随分真っ黒だな」

魔理沙

「髪色も何もかも真っ黒なんだが……？」

フラン

「……なんだか嫌な感じがする」

黒レミリア

「ふふっ……もう1人の自分と戦えるって中々無い経験ねえ……」

凶

「戦うこと前提なんだな」

黒レミリア

「あら、穏便に事を済ませたいって事かしら？」

凶

「できればな」

黒レミリア

「その理由は？」

凶

「……幼女と戦う趣味はねえからだよ」

黒レミリア

「……は？」

レミリア

「え？」

魔理沙

「はあ!？」

フラン

「クスクス……やっぱり凶って面白いわ！」

酷い理由である

凶

「てか幼女と戦うとか俺の心が保たんわあ！」

黒レミリア

「……そんな下らない理由で私との戦いを拒否するのね」

凶

「ああん!?下らんだと!俺にしてみたら下らない事ではないわあ!」

レミリア

「……」

ゴスツ

凶

「痛ったあ!何すんだよレミリアあ!？」

レミリア

「あんたが変な事言うからでしょう!もうちよつとまともな理由を言いなさいよ!」

魔理沙

「……全くだよ」

凶

「え？俺なんで失望の目で見られてんの？」

凶

「なあフラン、俺なんか変な事言っただけ？」

フラン

「んー……まあ変な事ではあるけど、私的には面白かったからいいや！」

凶

「そ、そうか……」

コントかな？

黒レミリア

「……コントみたいな事はここまでにして、そろそろ戦いましょうか」

空気が変わる

凶

「え、俺は戦いたくないんだけど……？」

レミリア

「……そうね。凶バカはほっといてやりましょうか」

魔理沙

「賛成」

フラン

「私もさんせーい」

凶

「ええ……?」

「1分くらい考えた末

凶

「ああもう仕方ねえ!俺もやったらあ!」

結局戦うことになった

黒レミリア

「最初からそう言えばいいのよ」

スピア・ザ・グングニルを出現させる

黒レミリア

「ふふっ……どっちが強いのかしらね?」

レミリア

「さて、ね。それは戦ってみないと分からないでしょう？」

レミリアも同じく出現させる

黒レミリア

「そうね」

言った瞬間

槍と槍が衝突した

崩壊した理想郷⑭

凶

「ほげー!!」

衝突し、爆発した衝撃で吹っ飛ぶ凶

魔理沙

「情けない声を出すんじゃない!」

箒に乗って吹っ飛んだ凶を助けにきた魔理沙がキヤツチする

凶

「やだ、魔理ちゃんイケメン」

魔理沙

「純粹にキモい」

凶

「サーセン」

魔理沙に蔑むような顔で言われたのですぐに謝る

フラン

「…………お姉様」

なんやかんや姉妹仲が良いので、心配になるフラン

と、ポンと肩に何かが乗った感触がした

フラン

「…………？」

隣を見ると魔理沙と凶が居て、凶がフランの肩に手を置いたようだった

凶

「土煙で見えねえけど、レミリアなら大丈夫だろ！フランの姉ちゃんだぜ？」

フラン

「…………凶」

フラン

「…………うん！」

不安げな顔から、笑顔になるフラン

凶

『やっぱり笑顔が一番だよなあ！』

土煙が晴れる

レミリア

「……………」

そこにはボロボロのレミリアがいた

凶

「……………マジで？」

魔理沙

「結構、ヤバくないか……………」

フラン

「……………お姉様っ!!」

助けようと突撃しそうになるフラン

凶

「待てっ！」

それを制する凶

フラン

「なんで止めるのっ！」

凶

「落ち着け、今お前が行ったって逆に黒レミリアにあしらわれるだけだ」

フラン

「でもっ！」

凶

「だから落ち着け。いいか？まだレミリアは殺されねえと言ってもいい」

フラン

「なんでそんな事がわかるの!？」

凶

「もし殺すならとつくに殺してるだろうよ。それを生かしてるって事はなんか目的でもあるんだろ。もしくは同じ自分だから手を抜いたか、様子見をしたんだろ」

凶

「余裕のあるヤツは大体手を抜いてくるんだよ。ゲームでも、現実でも、な」

凶

「とりあえずもう少しくらいは殺されねえよ。だから落ち着け」

フラン

「・・・・・・・・わかった」

黒レミリア

「同じ自分だから、同じ威力……なんて思ってたんでしょ？」

黒レミリア

「それは間違いね」

黒レミリア

「私は最初貴方たちを見た時から全員私より弱いとってたもの」

レミリア

「……へえ？随分と実力に自信があるようね？」

黒レミリア

「まあ、ねっ」

黒レミリアが手を翳すと、赤い光弾が飛ぶ

凶

「……うわっ!!」

それはこっそり近づこうとしていた凶に当たる

同時に爆発が起きる

レミリア

「凶っ!?!」

黒レミリア

「あれくらいはわからないと、ねえ？」

ニヤリと笑う

黒レミリア

「全員の中で一番弱かったし、今ので死んだんじゃないかしら？」

レミリア

「そんな……」

驚きと絶望したような表情だ

凶

「……あつぶな！くっそ危なかったんだけど!？」

黒レミリア

「……は？」

確実に爆発が起きて死んだはず、と黒レミリアは思った

凶

「おっと、そんな動揺してると」

XANXUSの銃を出現させ、撃つ

凶

「攻撃してくださいって言うてるようなもんだぜ!」

黒レミリア

「ツチ!」

さつきも出した光弾で相殺する

凶

「爆発の煙で見えねえから俺がどこにいるか把握しきれんだろ?」

黒レミリア

「舐めないでもらえるかしら」

黒レミリア

「それくらいわかるわよ・・・っ!」

凶がいるであろう所に突っ込む

凶

「うわっ!」

黒レミリア

「ほら、ね?」

黒レミリアは凶の腹に打撃を加える

凶

「いっふっ！……っつーかそんな格闘キャラだっけ……っ!?」

ツツコミながら吹っ飛ばされる凶

だが、口元は笑っていた

魔理沙

「凶を吹っ飛ばして満足か？」

黒レミリア

「……は？」

気づいた時にはもう遅い

魔理沙のマスタースパークが、至近距離で黒レミリアに放たれていた

魔理沙

「まさかアイツの作戦がこうも上手く行くなんてなあ」

少し前

凶

「……よし、作戦はこうだ」

凶

「まず俺が黒いのの気を引く。んで、そのあとフランがレミリアを救出。最後に魔理沙は俺がドーセやられるだろうからその隙を狙ってマスパをぶちかます。OK?」

魔理沙

「そんな上手く行くか?」

凶

「まーあの手のヤツは大体慢心して詰めが甘かったりするから、そこを突くっただけだ」

フラン

「もし慢心しなかったり詰めが甘くなかったらどうするの?」

凶

「そんな時はそんな時よ。そこは臨機応変になんとかしとくさ。とりあえず作戦通り頼む

ぜ」

魔理沙

「まあ、わかった」

フラン

「わかった。凶を信じるから」

凶

「おう、どーんと任せとけい」

凶

「とりあえ、ず、なんとか、なっただっぽいな・・・」

凶

「まさか・・・ここ、まで上手く、いくなんで、な」

一人で笑っていると魔理沙が来る

魔理沙

「凶！大丈夫か!？」

凶

「……おう、なんとか、な」

魔理沙

「待ってろ、今治してやるからな！」

黄色い光が、凶の傷を塞いでいく

凶

「……大分楽になった。サンキュー」

魔理沙

「つたく、お前もアイツに似てきてんじゃねえの?」

凶

「……それだけは勘弁だわ」

魔理沙

「……まあ、そうだな。私もアイツみたいに自己犠牲みたいな事はしたくねえしな」

凶

「俺もだわ」

魔理沙

「つと、とりあえずお前はここで休んでろ。私はレミリアとフランを見てくる」

凶

「あいよ、行つてら」

魔理沙は箒に乗って向こうへ行った

凶

「……さて、次どうすつか。あの程度で倒せるわけねえし、大体その作戦決まった後って相手が本気出すパターンなんだよな。それも加味して考えねえと本当に全滅もありうるぞ……?」

作戦を考え始めた凶だった